

マルクスの利子生み資本論：『資本論』の 草稿によって

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

72

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

2005-03-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003262>

マルクスの利子生み資本論

——『資本論』の草稿によって——*

大谷 禎之介

目 次

はじめに

1. エンゲルスによる編集作業の問題点

- (1) エンゲルスの編集作業とそれを困難にしたもの
- (2) マルクスの篇別構成とエンゲルス版の篇別構成との違い
- (3) エンゲルス版の篇別構成にかかわる重要な問題点
- (4) キーとなるマルクスの文章へのエンゲルスの手入れ

2. 利子生み資本論の課題と方法

- (1) 利子生み資本論にいたるまでの理論的展開
- (2) 利子生み資本論の課題と方法

3. マルクス利子生み資本論の構成と内容

A. 利子生み資本の理論的展開

- I. 利子生み資本の概念的把握
- II. 信用制度下の利子生み資本の考察

B. 利子生み資本にかんする歴史的考察

おわりに

付：本講義関連の既発表拙稿

『経済志林』掲載論稿正誤表

* 本稿は、2004年12月10日に法政大学経済学部で行なった、筆者の最終講義である。

はじめに

今年度の私の担当科目は「社会経済学応用」という看板を掲げておりますが、この科目の本籍はマルクス経済学の経済原論の後半です。あと2回、講義を残しておりますので、今日はまだ最終回ではありません。しかし、「最終講義」と呼ばれるものは、もともと、大学でやってきたことを締め括る「まとめ」のようなものでありましょう。学生の皆さんも、これからの話を、そのような意味での最終講義としてお聞きください。

そこで、この学部でやってきたことに締め括りをつけるということになりますと、この学部に属しているあいだに、私が一応はなんとかやりとげた、と言うことができるような研究上の仕事についてお話しすべきだと考えました。そのうち、最も長い時間をかけて、先年、ようやく終えましたのは、マルクスの『資本論』第3部の草稿のうちの、利子生み資本を取り扱った第5章の内容を分析し、紹介するという仕事でした。

私はこれまで、学部の紀要である『経済志林』に35本の書き物を発表してきましたが、このうちのほぼ6割がこの仕事にかかわるものでした〔稿末に関連拙稿のリストを付けておきます〕。その基礎となりましたのは、1980年から1982年にかけて、アムステルダムとモスクワで行ないました、『資本論』草稿の調査・研究の結果でありまして、しっかりと抱きかかえてもちかえりました6冊のノートです。これに関わる最初の論稿を発表したのは1982年、最後のものが2002年ですから、この仕事には、なんと21年もの年数をかけたわけです。たった6冊のノートを消化し終えるのに20年以上もかかったというわけで、この怠慢ぶり、のろまぶりは、なんともお恥ずかしい次第であります。

今日は、この仕事を通じて知ることができました、『資本論』第3部第5章の方法、構成、内容について、私の考えておりますところの一部を要約的にお話することで、最終講義といたします。

1. エンゲルスによる編集作業の問題点

(1) エンゲルスの編集作業とそれを困難にしたもの

マルクスは、1883年3月14日に亡くなりました。そのあとエンゲルスは、マルクスの残したもののなかに膨大な原稿の束を見つけました。それは、マルクスが「経済学批判」という大きな仕事に着手した1857年以降、『資本論』第1部を収める第1巻を1867年に刊行するまで、ほぼ三度にわたって書き直しを試みた経済学の草稿でした。エンゲルスは、『資本論』の第2部と第3部とを出版するのは自分の最大の義務だと考えまして、すぐに、マルクスの草稿から第2部をつくりあげる仕事に着手し、約2年で第2部を仕上げて刊行しました。それからただちに第3部の編集にかかったのですが、こちらの方には、なんと9年もの年月をかけて、ようやく1894年に出版にこぎつけたのでした。9年もの年月がかかった最大の原因は、マルクスの草稿のなかの、利子生み資本を取り扱っている第5章を編集する作業が困難をきわめたことでした。

エンゲルスは第3部への序文のなかでこんなふうに書いています。〈はじめは、すきまを埋めたり、ヒントが書かれているところを仕上げたりして、マルクスがこの篇でやろうとしたことのほぼすべてを提供しようとしてみたが、とうてい無理だということが分かった。そこで、それはあきらめて、現にあるものを整理し、どうしても必要な補足をするだけで我慢した〉。この同じ序文のなかでエンゲルスは、〈手を入れた箇所が、たんに形式的な性質のものでないかぎり、私によるものであることを明記した〉、と書いています。

エンゲルス版にはじっさい、括弧で括って、末尾に彼のイニシアルをつけた彼による挿入箇所があちこちにあります。そこで、ほかの方々と同じように、私も長い間、エンゲルスが自分によるものと明記した挿入部分

を除けば、エンゲルス版はほぼマルクスの草稿のとおりなのだろう、と考えておりました。

しかしエンゲルス版には、それではどうも納得がいかない、というところがあちこちにありまして、マルクスの草稿を自分の目で調べてみたいという願望は次第に強くなっておりました。

そんなおり、さいわい1980年に在外研究に出ることが許されまして、1982年まで、アムステルダムで『資本論』第2部と第3部の草稿に接することができ、とくに最後の時期には、第3部草稿を集中的に調べることができました。そのなかではっきりと分かってまいりましたのは、エンゲルス版には、エンゲルスが、自分によるものであることを明記しないで行なった実質的な手入れがいたるところにあり、しかも、それらがしばしば、きわめて重要な、内容上の変更をもたらしている、ということでありました。

エンゲルスによる第3部の編集作業のこうした問題点は、彼が最後まで手こずった、利子生み資本を取り扱っている草稿の第5章、彼の版では第5篇のところに、そしてとりわけ、彼の版の第25章から第35章にかけての部分に最も集中的に現われております。

エンゲルスが第5篇を編集するさいに、このように、マルクスの論述に内容上の変更をもたらすような手入れを行なうことになった背景として、私はなによりも二つの事情に注目しなければならないと思っています。

一つは、エンゲルスは、第2部の編集のときと同じく、第3部を編集するさいにも、まず、アイゼンガルテンという若者にマルクスの草稿を読んで書き取らせて、いったん読みやすい筆写稿をつくり、この筆写稿を使って本格的な編集作業を行なった、という事情です。私は、彼が編集作業に筆写稿を使ったことが、彼に草稿の内容をきちんと読み取れなくさせた一つの原因だったのではないかと推測しております。

いま一つは、エンゲルスはマルクスから、いくつかの手紙によってしか、第3部の内容を知らされていなかったようなのですが、エンゲルス

は、そうした手紙のなかでマルクスが書いていたわずかの語句から、第5章について一種の先入見をもつことになり、それが彼の編集に大きな影響を与えたのではないか、ということです。

マルクスは、第5章を書いたあとでしたが、エンゲルスへの二つの手紙〔1867年5月7日付および1868年11月14日付〕のなかでこの章を「信用にかんする章」と呼びました。また、第3部の内容を説明した1868年4月30日付の手紙では、この第5章を「企業利得と利子とへの利潤の分裂。利子生み資本。信用制度」と書いていました。ここでは、最後のところに「信用制度」と記されていたわけです。

エンゲルスは、第3部の編集を始めてからあちこちに書き送った手紙のなかで、第5篇を「信用にかんする篇」〔1885年11月13日付および1893年3月20日付〕、「信用制度」〔1892年11月22日〕、「銀行と信用の篇」〔1889年7月4日付、1892年11月4日付、1893年2月24日付、1893年3月14日付〕、「銀行資本と信用にかんする篇」〔1885年5月19日付〕などと呼びました。また、原稿を出版社に送ったのちの1894年6月1日には、この篇を「「利子と「企業者利得」とへの利潤の分裂、貨幣資本一般、銀行と信用」」と呼んでいます。これは、マルクスからの手紙での表現にならったものだったと言ってよろしいでしょう。エンゲルスは、この篇は「銀行と信用の篇」なのだと思い込んでいて、そのようなものに仕上げなければならないと考え、それに合うように草稿にいろいろな手入れを行なったのではないかと考えられるのです。

(2) マルクスの篇別構成とエンゲルス版の篇別構成との違い

そこで、マルクス草稿の第5章のなかに見られる見出しのない項目番号と、エンゲルス版第5篇の章別編成とを対比してみましょう。次の一覧をご覧ください。

草稿第5章とエンゲルス版第5篇との対応一覧

草稿 第5章	エンゲルス版 第5篇
第5章 利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）とへの利潤の分裂。 利子生み資本	第5篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本
1)〔表題なし〕	第21章 利子生み資本
2) 利潤の分割。利子率。利子の自然率	第22章 利潤の分割。利子率。利子率の「自然」率
4)〔表題なし〕〔4)は3)の誤記〕	第23章 利子と企業者利得
5) 利子生み資本の形態における剰余価値および資本関係一般の外面化 〔5)は4)の誤記〕	第24章 利子生み資本の形態における資本関係の外面化
5) 信用。架空資本	第25章 信用と架空資本
	第26章 貨幣資本の蓄積。それが利子率に及ぼす影響
	第27章 資本主義的生産における信用の役割
I)〔表題なし〕	第28章 流通手段と資本。トゥックとフラートンとの見解
II)〔表題なし〕	第29章 銀行資本の構成部分
III)〔表題なし〕	第30章 貨幣資本と現実資本Ⅰ
	第31章 貨幣資本と現実資本Ⅱ
	第32章 貨幣資本と現実資本Ⅲ
	第33章 信用制度下の流通手段
	第34章 通貨主義と1844年のイギリスの銀行立法
	第35章 貴金属と為替相場
6) 先ブルジョア的なもの	第36章 先資本主義的なもの

草稿の第5章は「利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）への利潤の分裂。利子生み資本」というタイトルをもっていますが、このなかには1)から6)までの六つの見出しがあって、それらが六つの節をつくっています。このなかでいちばん大きい「5)信用。架空資本」という節の途中には、I), II), III) という三つの項目番号があります。草稿のこうした節および項目は、右側のエンゲルス版第5篇の章別編成と、表のように対応しています。

このうち、エンゲルス版の第21章から第24章までは、草稿の1)から4)までの内容とそれぞれほぼ一致しています。また草稿の6)も、エンゲルス版第36章とほぼ一致しています。ですから、エンゲルス版第5篇を草稿と比べたときに最も目を引くのは、草稿の「5)信用。架空資本」が、エンゲルス版では第25章から第35章までの11の章に分けられているということです。

(3) エンゲルス版の篇別構成にかかわる重要な問題点

この部分での、篇別構成に関わる最も重要な問題点を二つだけ挙げます。

第1。草稿の第5節の「信用。架空資本」というタイトルは、第6節「先ブルジョア的なもの」が始まる前のところまでの部分につけられたもの、つまりエンゲルス版では第25章から第35章の11の章に分けられている部分の全体についてのものだと考えられます。エンゲルスは、このタイトルを、この第5節のうちの最初のごくわずかの部分につけられたタイトルだと勘違いをしたようでして、この部分を第25章としたうえで、それに「信用と架空資本」というタイトルを与えました。しかし、草稿のこの部分を見ますと、そこには「架空資本」に触れたところがほとんどないのです。そこでエンゲルスは、彼の第25章をこのタイトルに見あうものにしようとして、草稿のあとの方から、架空取引にかんする抜萃をここにもってきたり、自分が書いたことを明記した、架空取引にかかわる二つの書き込

みを挿入したりしました。読者は当然に、エンゲルスが手を加えた箇所を見て、〈タイトルに「架空資本」とあるのはこのあたりのことなのだろう〉、と考えて終わりにする、ということにならざるをえませんでした。

第2。草稿では、エンゲルス版で第25章の最初の約4分の1ほどに利用された、もともと本文用のテキストとして書かれた部分のあとに、本文とは別に材料集めを行なったノート的な部分があり、そのあとで、ふたたび本文用のテキストに立ち戻っています。こういうことが分かりますのは、草稿を書くとき、マルクスは独特な、用紙の使い方をしているからなのです。

A 3判よりも少し大きい紙を想像してください。それを二つ折りにしますと、A 4判よりもやや大きいページが4ページできます。マルクスはこれの各ページに、ものすごく小さい字で原稿を書いていくのです。

そのさいに、注目しなければならないことが一つあるのです。マルクスは、書き始める前に、このA 4判大の4ページを、いったんさらに二つに折って、折り目をつけます。これで、各ページに、この折り目を境にして、上の半分と下の半分ができますね。マルクスは、草稿の本文を書いているときには、この上の半分だけを使って、下の半分は、脚注を付けたり、あとから書き加えをしたりするために、なにも書かないで空けておくのです。MEGAに掲載されている草稿の317ページのフォトコピーを見てください。

草稿, 317 ページ

(MEGA, II/4.2, S.1061)

上半部:

本文用テキスト

← 折り目

下半部:

脚注, テキストの追加, など

ここでは, 下半部に書かれているのは, 上半部のテキストへの注や追記です。

それにたいして, 本文とは別の, 材料集めのノートを書きつけるときには, 二つ折りの折り目を無視して, ページ全体を埋め尽くして書いていきます。これも MEGA に掲載されているものですが, 草稿の 532a ページのフォトコピーを見てください。

ところが、エンゲルスの編集を見ますと、彼は、マルクスが本文用のテキストを一時中断して行なった材料集めの部分を、本文として書かれた前後の部分から区別できなかったとしか思えない。彼は、いま申しました材料集めのノートのうちから、初めの方の一部を第25章のなかに組み込み、そのあとの部分から「第26章 貨幣資本の蓄積。それが利子率に及ぼす影響」という独立の章を作りました。エンゲルスがこのような誤認をしたのは、この部分を編集するとき彼は、草稿のオリジナルは見ないで、口述筆記によってつくったときからずいぶん年月を経ている筆写稿を使ったためだったのだと思います。エンゲルスのこの処理によって、マルクスの草稿では、本文として書かれた、第25章の初めのほぼ4分の1に続く本文となっておりますのは、エンゲルス版の第27章に使われた部分でありますのに、この二つのもののあいだに、材料集めのノートから作った第26章がはいってしまった結果、25章、26章、27章という、三つの章が内容的にどのようにつながるのか、叙述の展開をどのように読んだらいいのか、まったく分からなくなってしまいました。

以上、典型的な事例を二つだけ挙げましたが、エンゲルスの、適切とはとても言えない、このような手入れの結果、エンゲルス版からは、草稿の「5)信用。架空資本」の本文として書かれた部分のつながりを読み取ることができなくなっています。このことは、第25章から第35章までの篇別構成をどう理解すべきか、ということについて、かつてこの分野の専門家たちがなされていた、あれやこれやの苦し紛れの解釈を見れば、一目瞭然なのです。

(4) キーとなるマルクスの文章へのエンゲルスの手入れ

さて、マルクス自身の文章のなかに、テキストの筋道を読むことにヒントを与え、あるいは手がかりとなる箇所がいくつかありますので、論者たちがこうした文章を解釈して、自説の論拠にしてきたのは当然のことでありました。ところが、じつは、そのようなものとしてよく引用されてきて

いた文章そのもののなかに、文意をすっかり変えてしまうようなエンゲルスの手が加えられていたのです。ここでは、二つだけ、挙げてみましょう。

第1。草稿の第5節「信用。架空資本」の冒頭で、マルクスはこう言っています。——「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具との分析は、われわれのプランの範囲外にある。」

エンゲルスはこの文のうちの「分析」を「詳しい分析」に変えました。ここで「われわれのプラン」と言っているのは『資本論』のことと考えていいのですから、マルクスは、「信用制度の分析」が『資本論』の範囲外だと言っていたのですが、エンゲルスは、「詳しい」という一語を付け加えることで、マルクスの文章を、「詳細」にわたらないかぎりでの「信用制度の分析」は『資本論』の第5篇の範囲に含まれているのだ、という文章に変えてしまったのです。そして実際に多くの論者がこの文章を、マルクス自身が、第5篇では信用制度を取り扱うのだ、と言明している箇所として、繰り返して引用してきていたのです。

第2。草稿の第5節「信用。架空資本」のうち、エンゲルス版で第27章の末尾近くのところで、マルクスは、これからなにを考察するのか、ということについて、次のように書いています。——「いまわれわれは、利子生み資本そのものの考察に移る。」

そして、「利子生み資本そのもの」というところに、角括弧で括って、「信用制度による利子生み資本への影響〔言い換えれば、利子生み資本が信用制度によって受ける影響です〕、ならびに利子生み資本がとる形態」と書いています。

ここで、マルクスが、「利子生み資本そのものの考察に移る」という部分を、エンゲルスは、「以下の諸章でわれわれは、信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する」と書き換えました。なにを考察するのか。マルクスにあっては「利子生み資本そのもの」ですが、エンゲルスの文章では「信用」です。また、マルクスの文章では括弧にはいつている、

「利子生み資本が信用制度によって受ける影響、ならびに利子生み資本がとる形態」という箇所を、エンゲルスは、「信用が利子生み資本に及ぼす影響、ならびにそのさい信用がとる形態」、と変更しました。つまり、マルクスが考察の対象を「利子生み資本」としていたのに、エンゲルスはそれを「信用」に変えたのです。エンゲルスの手入れによって、これ以降では、「利子生み資本そのもの」を信用制度との関連のなかで考察する、と言っていたマルクスの言明が、「信用」つまり信用制度を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する、というように、信用制度と利子生み資本との位置が完全に逆転させられてしまいました。そしてこの文章も、多くの論者によって、マルクス自身がこれ以降のところで信用制度を考察するのだと明言している箇所として、繰り返して引用されてきたのです。

エンゲルスは、なぜ、このような文意を変えるような手入れを行なったのでしょうか。それは、この二つのどちらも、彼が、第25章以下は信用ないし信用制度を対象としているのだ、と思い込んでいて、これに合うように手を加えたのだ、ということと説明できると思います。

以上、エンゲルスによる編集上の問題点から二つだけを挙げましたが、これだけを見ても、エンゲルス版では、第5節「信用。架空資本」での、マルクスによる展開の筋道を読み取ることがきわめて難しくなっていた、ということをご推察いただけるものと思います。

* * *

ところで私は、1982年の春に帰国して、この年から、『資本論』第3部草稿、とりわけその第5章についての論稿を発表しはじめました。当時はまだ、マルクスの草稿を読むには、アムステルダムの社会史国際研究所を訪れて、そこでフォトコピーを閲覧し、自分で解読するほかはありませんでしたから、そうすることのできない研究者たちにとっては、私の論稿は、第3部草稿の内容に接するほとんど唯一の手がかりという意味をもっていました。

ところが、それから12年後の1993年に、この草稿を収めた MEGA、つまり完全版の『マルクス＝エンゲルス全集』の第2部第4巻第2分冊が刊行されて、日本にもはいつてきました。この MEGA 版が出てからは、第3部草稿を活字で読むことができるようになり、したがって、エンゲルス版と対比することもできるようになったわけです。

私はそこで、この仕事を打ち切ることも考えました。しかし、エンゲルス版との対比だけでも、だれにでも簡単にできるというものではありませんし、MEGA 版にはいろいろと不十分なところや訂正されるべきところがあります。そこで思い直しまして、そのあとも引き続き、ただし今度は MEGA 版を使って、第5章の全文を翻訳、紹介し、それにエンゲルス版とのすべての相違を注記したり、私の考証やコメントをつけくわえたりする、という仕事を続けてきまして、それが2002年に完了したという次第です。

そこでこれから、私のこの仕事のなかで浮かび上がってきた、エンゲルス版では見えていなかった、草稿そのものの構成と内容とはどのようなものか、ということをお話したいと思います。しかし、『資本論』の、とくにその第3部の内容をご存知ない方のほうが多いと思いますので、それにはいる前に、この第5章での利子生み資本の考察というのは、『資本論』全体のなかでどのような位置にあるのか、マルクスはこの章でなにをしようとしたのか、また、どのような方法によって叙述を進めようとしていたのか、ということをお話しておいたほうがいいと思います。

2. 利子生み資本論の課題と方法

(1) 利子生み資本論にいたるまでの理論的展開

① 第1部および第2部

まず、『資本論』全体のなかで、第3部第5章での利子生み資本論はど

ういう位置にあるのか、ということをお話します。

『資本論』は三つの部からなっています。第1部は「資本の生産過程」、第2部は「資本の流通過程」です。第3部は、マルクスの草稿では「総過程の諸姿容」というタイトルがつけられています。この姿容 *Gestaltung* というのは、人々の目に見える具体的な姿のことだとお考えください。エンゲルスはマルクスのこのタイトルを「資本主義的生産の総過程」に変更しています。

この三つの部からなる『資本論』の基本的な性格は、マルクスの言葉を使って言いますと、もろもろの「特殊的研究」の土台となるべき、「資本の一般的分析」あるいは「資本主義的生産の一般的研究」です。

第1部の「資本の生産過程」では、資本の前提をなしている商品と貨幣とを分析、展開し、そのうえで資本の生産過程、つまり資本の価値増殖の過程および資本の蓄積の過程を解明しました。この第1部の展開は、さらに第2部での「資本の流通過程」の分析によって補足されます。こうしてこの二つの部で、資本が経ていく過程全体の深部に潜んでいる資本の本質、ないしそれを貫く基本的な諸法則、内的な関連が明らかにされました。

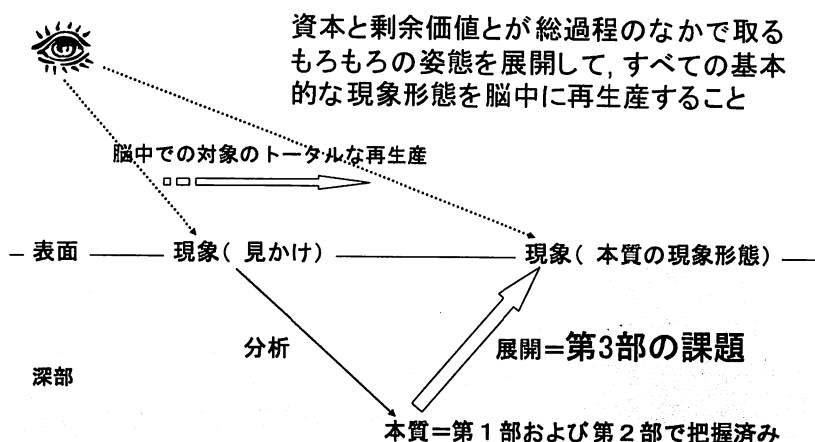
② 第3部

このように資本の本質を把握したうえで、今度は第3部で、そのような資本とそれが生み出す剰余価値とが、過程全体のなかで取っているもろもろの現象形態、つまり現われてくる姿ですね、それを、抽象的なものからより具体的なものへと次々と展開していった、最後に、そのような基本的な形態の全部を頭のなかに描くことができるようになったところで、「資本の一般的分析」が完結することになります。

第3部での展開は次のように進められています。なおここでは、エンゲルス版に従って、草稿での章を篇と呼んでおきます。

まず第1篇では、資本と剰余価値が、自分の仔を生む元本としての資本とそれが生む仔である利潤という姿をとることが明らかにされます。

「第3部 総過程の諸姿態」の課題



第2篇では、資本が利潤を生む率つまり利潤率は、商品が価値通りに販売されるならば生産部門によってさまざまであるのに、資本が利潤率のより高い部門をめざして移動する運動によって、どの部門の商品の市場価格も、資本に平均的な利潤をもたらすような水準の価格を中心に変動するようになることが明らかにされます。利潤率の平均利潤率への均等化と生産価格の成立ですね。

第3篇では、資本の蓄積とともに進んでいく生産力の発展は、同じ労働量を取り扱う物的生産要素の量を、またそれらの価値量を増大させていくので、平均利潤率は傾向的に低下していく、ということが解明されます。

以上のところまでは、まだ、産業資本とその利潤だけが問題でしたが、次の第4篇では、この産業資本が自分のなかから商業資本を分離し、自立化させることによって、剰余価値の一部が商業利潤という形態を取るようになることを明らかにします。

商業資本は自分では剰余価値を生産しませんが、産業資本がしなければならぬ売買の仕事を引き受けることで産業資本から剰余価値を分けても

らうのですから、資本の再生産過程のなかで機能し、増殖する資本だという点から見ると、産業資本と同じです。そこでマルクスは、産業資本と商業資本を合わせて、機能資本、あるいは生産的資本、あるいはまた、再生産的資本と呼んでいます。

そこでいよいよ問題の第5篇、草稿の第5章ですが、ここでは、生産的資本から、利子生み資本が派生し、自立化することによって、剰余価値の一部分が利子の形態をとること、この利子生み資本と利子とが論じられます。この章の内容は、あとで立ち入ることにいたします。

その次の第6篇では、資本によって近代的な形態を与えられたとはいえ、依然として土地所有があるかぎり剰余価値の一部分が取らざるをえない、地代という形態が解明されます。

そして最後に第7篇で、利潤、利子、および、地代という剰余価値のこれらの形態は、第1部ですでに解明された労賃とともに、それぞれ独立した収入として現われ、それに対応して、資本、土地、労働がそれぞれの収入の源泉として現われる、ということが明らかにされます。

こうして、資本主義社会の表面でだれの目にも見えている、資本および剰余価値の基本的な現象形態が、その深部にある本質、諸法則からすべて展開され、説明され終えました。「資本の一般的分析」というのは、まず、資本の現象を分析して現象の奥に潜んでいる本質をつかみだし、次に、その本質から当初の現象を展開する、説明する、developする、という仕事なので、マルクスはこの仕事を、三つの部からなる『資本論』でやり遂げようとしていたわけです。

③ monied capital について

ここでちょっと、マルクスが第3部第5章できわめて頻繁に使った一つの言葉、私もこのさきで繰り返して使う一つの言葉について説明をしておきます。

第3部の第4章までのどの章でも分析の対象がつねに資本であったように、この第5章でも分析の対象は資本ですが、ここではそれが利子生み資

本という形態をとっている資本でして、これを研究しなければなりません。しかし、発展した資本主義的生産様式のもとでは、この利子生み資本という資本が社会の表面で取っている姿、人々の目に見えている典型的な形態は、さまざまな源泉から銀行に集まってきて、そこで運用を待っている資本です。19世紀のイギリスでは、経済界の当事者たちはこの資本を monied capital と呼んでいました。monied という語は、貨幣を意味する money が動詞として使われ、その過去分詞が形容詞となったものです。そこでこれを「貨幣資本」と訳したくなりますし、そう訳すのはまったくの誤りだとは言えませんが、しかしこれをもっぱら「貨幣資本」と訳して済ましてしまうと、いろいろな誤解が生まれます。と言いますのも、産業資本や商業資本が運動のなかで貨幣の形態を取っているとき、この形態にある資本のことを「貨幣資本」と言いますので、これと一緒にしてしまうからです。マルクスは、資本が循環のなかで取る形態としての「貨幣資本」とはっきり区別して、銀行制度のなかで運動している利子生み資本が人々の表象のなかに現われる形態を、分析すべき対象としてつかまえるときに、人々が使っていたこの monied capital という呼び方は、まさに言い得て妙だ、と考えたのではないかと思います。彼は第3部第5章で、信用制度のもとでの利子生み資本を、圧倒的に、monied capital という英語で書いているのです。

マルクスはこの monied capital に当たるいいドイツ語を見つけることができなかったようですが、私もぴったりの日本語を見つけることができおりませんので、今日はこのあとも、ときどき、monied capital という英語を使わせていただきます。

なお、エンゲルス版はドイツ語版として刊行されたものなので、エンゲルスは、マルクスが英語で書いている語句をすべてドイツ語に置き換えましたが、そのさい、草稿での monied capital を「貸付資本」や「貨幣資本」の意味のドイツ語に置き換えました。そのためにエンゲルス版では、マルクスのこうした用語法はすっかり見えなくなっています。

(2) 利子生み資本論の課題と方法

さて、第5章でのマルクスの叙述の過程は、彼自身が対象についての研究を深めていく過程でもありました。論述は脇道からさらにその脇道にはいることもあり、ところどころに雑然とした材料集録のノートが挟まっています。さきの「対応一覧」の表でも分かりますように、節に当たる六つの項目番号のうちの二つには表題がなく、第5節のなかのI), II), III) にも表題はありません。しかし、それにもかかわらず、残されております草稿から、この章でマルクスがはっきりとした課題をもっていたこと、これからお話ししますような一貫した方法によって叙述を進めたことを読み取ることができますし、また、それを反映するしっかりした構成を読み取ることにも十分に可能だと思います。

次に掲げます「第5章の構成」を一瞥していただきます。

第5章の構成

A. 利子生み資本の理論的展開

I. 利子生み資本の概念的把握

- (1) (草稿:「1」〔表題なし〕)(エンゲルス版:「第21章 利子生み資本」)
- (2) (草稿:「2」利潤の分割。利子率。利子の自然率)(エンゲルス版:「第22章 利潤の分割。利子率の「自然」率」)
- (3) (草稿:「4」〔表題なし, 4は3の誤記〕)(エンゲルス版:「第23章 利子と企業者利得」)
- (4) (草稿:「5」利子生み資本の形態における剰余価値および資本関係一般の外面化〔5は4の誤記〕)(エンゲルス版:「第24章 利子生み資本の形態での資本関係の外面化」)

II. 信用制度下の利子生み資本の考察 (草稿:「5」信用。架空資本)

- (1) 信用制度概説

- (a) 信用制度の二側面とその基本的な仕組み（エンゲルス版：「第24章 信用と架空資本」の初めの約4分の1）
- (b) 資本主義的生産における信用制度の役割（エンゲルス版：「第27章 資本主義的生産における信用の役割」）
- (2) 信用制度下の利子生み資本（monied capital）の分析
 - (a) monied capital をめぐる概念上の諸混乱（草稿：「I」〔表題なし〕）（エンゲルス版：「第28章 流通手段と資本。トゥックとフラートンとの見解」）
 - (b) monied capital の諸形態。架空資本としての monied capital（草稿：「II」〔表題なし〕）（エンゲルス版：「第29章 銀行資本の構成部分」）
 - (c) 実物資本との関連における monied capital の分析（草稿：「III」〔表題なし〕）（エンゲルス版：「第30章 貨幣資本と現実資本I」, 「第31章 貨幣資本と現実資本II」, 「第32章 貨幣資本と現実資本III」）
- (3) 地金の流出入。信用システムの貨幣システムによる被制約性（草稿：ノート「混乱」のあと、本文として書かれた部分）（エンゲルス版：「第35章 貴金属と為替相場」）
- B. 利子生み資本にかんする歴史的考察（草稿：「6」先ブルジョア的なものの）（エンゲルス版：「第36章 先資本主義的なもの」）

全体を大きく、Aの「利子生み資本の理論的展開」とBの「利子生み資本についての歴史的考察」という二つに分けてあります。

そして、Aの「理論的展開」をさらに二つに分けています。ローマ数字のIは「利子生み資本の概念的把握」です。

その次のローマ数字のIIは「信用制度下の利子生み資本の考察」です。

なお、この先でも、「概念的に把握する」とか「概念的把握」という言葉をしばしば使わせていただきますが、この言葉で私が考えておりますの

は、平たく申しますと、あるものの本質をしっかりとつかまえて理解し、それを特定の概念として思考のなかに定着させることです。ドイツ語をご存知の方は、begreifen のことだとお考えください。

以上が、大きく見た、第5章全体の構成です。

この利子生み資本論で、マルクスはなにをしようとしたのか。またそのためにどのような方法をとったのだろうか。はじめに、全体にかかわる二つのことをお話ししておこうと思います。

① 第5章の課題と展開の方法

この第5章の展開を通じて、最終的に、頭脳のなかに再生産しなければならないのは、利子生み資本の具体的な姿、すなわち monied capital です。資本が取るこの姿を、資本の生産過程および流通過程の分析を通じて把握された資本の本質にもとづいて展開すること、これがこの章の課題です。

私たちの目に見えている monied capital は、信用制度または銀行制度のなかで、つまり、さまざまな歴史的事情のなかで人為的に形成され、法的に保護、規制されている制度的な仕組みのなかで、さまざまな具体的な形態をとって運動しています。

それらの内部にある内的で本質的な関連を把握して、それらを——マルクスの表現を使いますと——「多くの規定と関連とからなる豊かな総体」として頭のなかに再生産するには、どのように歩みを進めなければならないのか。これが、信用制度のもとでの利子生み資本を分析し、展開する「方法」の問題です。

理論的な展開は、この第5章以前にすでに得られているすべてのことを前提して行なわれるわけですが、ここでも、分析すべき対象についての表象、つまり最初に現象として現われているものについてのイメージは、頭のなかにもち続けていかなければなりません。ただ、分析し、展開していく歩みは、この表象、イメージを、分析によって新たに得られた理論的認識によって、次々に概念に変えて行く、概念的に把握していく過程ですか

ら、そうした表象、イメージは次第に内部の仕組みがはっきり見えるようなものになり、いわば、表面だけしか見えていない像から、内部の仕組みがはっきりと透けて見える透視像に変わっていくわけです。もちろんそのためには、対象の抽象的、一般的、基本的な側面から、次第に、より具体的、特殊的、二次的、副次的な側面へと進むのでなければなりません。これが理論的展開の順序ということになります。

② 貨幣取扱資本と利子生み資本

資本が作り上げた信用制度・銀行制度のもとで運動する独自の種類の資本を、資本の基本的な形態として見ますと、じつはそれは、利子生み資本であるだけでなく、貨幣を取り扱う業務を行なって手数料を受けとり、これを利潤とする貨幣取扱資本という資本でもあるのです。この貨幣取扱資本それ自体は、流通の仕事に専門的に従事することによって商業利潤を手に入れる商業資本のうちの特殊な種類なのですね。ですから、この資本は、商業資本を分析した第4章ですでに考察されていました。そこでは、信用制度・銀行制度のもとで運動している資本として利子生み資本と渾然一体となって現われている貨幣取扱資本の具体的な姿から、利子生み資本の側面を度外視することによって取り出された、純粋な形態での貨幣取扱資本を対象に据えて分析が行なわれて、貨幣取扱資本という資本の本質が捉えられ、概念的に把握されていました。

第5章では、信用制度・銀行制度のもとで運動している資本の具体的な姿から、今度は、すでに把握されている貨幣取扱資本の側面を度外視することによって取り出した純粋な形態での利子生み資本を対象に据えて分析を行ない、これによって、まず、利子生み資本という独自の資本の本質をとらえる、つまり概念的に把握します。

マルクスは第3部で、こうした分析の手順を取ることによって、信用制度のもとで運動している資本の具体的な姿態から、区別されるべき、貨幣取扱資本と利子生み資本という二つの資本形態を純粋なかたちでつかみ、明晰に把握することができたのでした。

3. マルクス利子生み資本論の構成と内容

A. 利子生み資本の理論的展開

I. 利子生み資本の概念的把握

そこで今度は、マルクスの利子生み資本論の構成を、もう少しその内容に踏み込んで見ていきましょう。

第5章は、まず、私たちの目に見えている、信用制度のもとでの monetized capital から、最も単純で純粋な姿にある利子生み資本を取り出し、それを分析して、利子生み資本の本質を明らかにします。つまり、利子生み資本を概念的に把握するわけです。この部分については、エンゲルスもほとんど草稿によることができましたので、エンゲルス版で構成の意味と展開の内容とをとらえることが十分に可能ですので、ごく簡単にお話しします。

(1) 「1」(エンゲルス版:「第21章 利子生み資本」)

まず、第1節です。ここには項目番号があるだけで、表題はありません。

この節では、利子生み資本という独自の資本形態そのものが解明されています。まず、貨幣市場で貨幣が、資本という性質をもった商品として売買されている、という当事者たちの目に映っている現象を、これまでに展開されてきている商品・貨幣・資本の概念にもとづいて分析して、貨幣が、資本として機能すれば平均利潤をもたらすという使用価値をもつものとして商品となっていることを明らかにし、また、そのような商品の価格として現われる利子は、じつは、貨幣が生産的資本として機能することによって生み出される平均利潤、本質的には産業資本が生産過程で取得する剰余価値の一部分にほかならないことを明らかにしています。そのうえで、貸付けられたのち、一定期間を経て、利子を伴って返済される、という利子

生み資本の独自の運動形態では、その基礎となっている、再生産過程における生産的資本の運動はすっかり消え失せていて、利子生み資本が生産過程から自立化していることが示されています。

(2) 「2) 利潤の分割。利子率。利子の自然率」 (エンゲルス版: 「第22章 利潤の分割。利子率の「自然」率」)

次は第2節「利潤の分割。利子率。利子の自然率」です。

ここでは、利潤から分割されたその一部分である利子が、元本としての資本の増殖分として利子率という規定を受けとることと、この利子率の量的諸法則が明らかにされています。また、利子は利潤の一部でしかないので、利子率は理論的にはゼロ%と平均利潤率とのあいだで動くことになりますが、利子は利潤とは違ひまして、商品価値のうちの特定の価値部分を取る形態ではありませんから、利子率を決めるものは、貨幣市場での利子生み資本の需要供給、要するに競争関係だけであって、古典派経済学者が考えたような利子の「自然率」のようなものは存在しないこと、こういうこともここで明らかにされています。

(3) 「4) [4)は3)の誤記]」 (エンゲルス版: 「第23章 利子と企業者利得」)

次に第3節ですが、ここでも項目番号があるだけで、表題は書かれていません。

利子が成立しますと、利潤のうちから利子を貨幣資本家が自分のものにし、その残りの部分を生産的資本家——つまり産業資本家および商業資本家——が自分のものにすることになります。利潤のこのような分割は、もともと、その分割比率が利子率によっていつも変わるような量的分割ですが、この二つの部分のうち、利子のほうは、資本を所有していることの果実として現われるのに対応して、その残りの部分は、資本を機能させたことの果実として現われて、企業利得と呼ばれるようになります。こうして、もともとは利潤をただ量的に分割した二つの部分だったものが、まったく別の二つの根拠から別々に生まれる、質的に異なった二つの部分とし

て現われるようになります。その結果、自己資本を含む一切の資本が、所有者にそれ自体として資本所有の果実である利子をもたらすものと観念されることになります。ここではさらに、資本主義的生産の発展とともに、協業における指揮・監督労働が、機能資本家が果たす機能として資本の所有から完全に分離するだけでなく、さらに進んで、それがたんなる機能者としての賃労働者に委ねられることによって、資本家は生産過程からは不必要な人格として消えていくことが述べられています。

- (4) 「(5)利子生み資本の形態における剰余価値および資本関係一般の外
面化 (5)は4)の誤記)」(エンゲルス版:「利子生み資本の形態での資本
関係の外面化」)

最後に、第4節「利子生み資本の形態における剰余価値および資本関係一般の外面化」です。

ここでは、ここまでの叙述のなかに含まれていた、利子生み資本での「利潤にたいする利子の自立化」の展開を総括して、利子生み資本および利子の形態では、資本および剰余価値が、資本という性質をもった貨幣という果樹と、この果樹から自ずから実る果実として現われる、という、資本の物神的な姿と、そこから生じる資本物神の表象、観念とが解明されています。ここでは、ひとりでに増えていく貨幣、という資本の形態だけが、完成した姿で現われているわけです。

以上が利子生み資本の概念的把握です。こうして、利子生み資本の本質とはなにか、その本質はどういう形態をとらないではないのか、こういうことが明らかとなりました。

Ⅱ. 信用制度下の利子生み資本の考察

そこで次に、「信用制度下の利子生み資本の考察」のところに移ります。草稿では「5)信用。架空資本」、現行版では第25章から第35章までがこれにあたります。

この第5節は、大きく、三つの部分に分けることができます。第1は

「信用制度概説」で、序論としての意味をもつ部分です。第2は「信用制度下の利子生み資本の分析」で、これがこの節の本論です。第3は、「地金の流出入。信用システムの貨幣システムによる被制約性」という表題をつけましたところで、この節を締め括る部分です。

(1) 信用制度概説

さて、利子生み資本という資本がどのようなものであるか、ということが分かりますと、こんどは、それがとっている具体的な形態、つまり *monied capital* という信用制度のもとでの利子生み資本の分析に向かいますが、そのさい、一つ、方法上の大きな問題があります。

この分析には、もちろん、利子生み資本の概念的把握、本質把握が前提されるだけでなく、第3部以前に行なわれていた、資本の総過程についての認識が前提されています。しかしそれだけではまだ十分ではありません。それらに加えて、この独自の資本が運動する舞台である信用制度および銀行制度がどのようなものか、ということが分かっているなければなりません。しかし、これまでのところではこれについてはまだまとまったかたちで取り扱うことをしてきていないので、まず、それをやっておく必要があります。つまり、この第5章でこれから分析しようとしているのは、*monied capital* という姿にある信用制度下の利子生み資本ですが、これの分析を行なうためには、まずもって、それが運動するいわば舞台、環境である信用制度および銀行制度の基本的な仕組みを知っておく必要があるのだ、ということなのです。

そこで、信用制度・銀行制度が私たちに与えている表象、イメージを、これまでの展開のなかで得られている諸概念、つまり貨幣や貨幣の諸機能、貨幣資本、貨幣取扱資本、利子生み資本等々の概念によって分析し、信用制度の最も本質的な内容をつかみだして、信用制度を概念的に把握します。これによって、信用制度とはなんであるか、ということが明らかになると同時に、そのなかで、すでに概念的に把握されていた貨幣取扱資本

および利子生み資本が、この信用制度のもとで monied capital という具体的な姿をとっていることも明らかとなります。

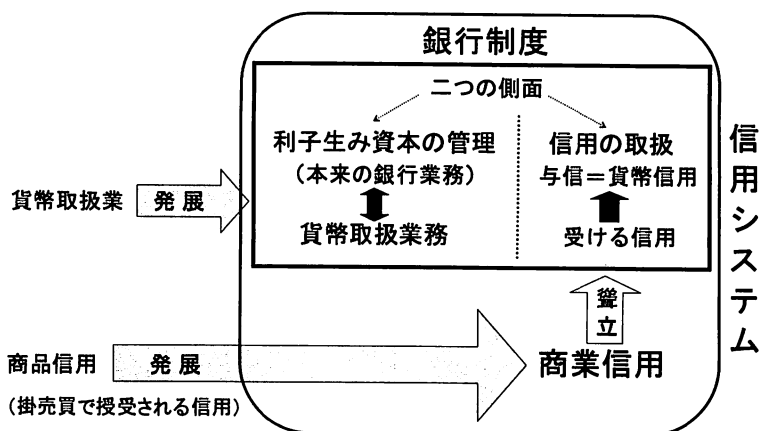
マルクスがこの仕事をやったのが、「(1)信用制度概説」とした部分です。草稿では、「5)信用。架空資本」のうちの、I) という項目番号があるところよりも前の部分です。この部分の前半は、マルクスが本文として書いた、エンゲルス版第25章の最初の4分の1にあたる部分です。後半は、マルクスが同じく本文として書いた、エンゲルス版では第27章の部分です。

(a) 信用制度の二側面とその基本的な仕組み

ここでは、信用制度そのものについて最も基礎的な事柄が説明されています。

まず、信用制度・銀行制度の二つの側面、すなわち、商業信用を基礎とする信用システムの上層部としてもろもろの信用を取り扱うという側面と、貨幣取扱資本から発展して貨幣取扱業務と結びついて行なわれる利子生み資本の管理という側面、この二つの側面が明らかにされます。この後者の、利子生み資本の管理こそが、貨幣取扱業を営む貨幣取扱業者を銀行業者にするのである。銀行は、一方で、貨幣取扱業務を通じて、また借り手の代表者として、社会のなかで遊んでいる貨幣資本と貨幣とを集めて、それらを、貸し付けることができる monied capital にします。銀行は、他方で、貸し手の代表者として、このような資本を、再生産上の必要に応じて各生産部門、各個別資本に配分します。ここでは利子生み資本は、たんに、借り手から貸し手に支払われる利子によって増殖する資本、という抽象的、一般的な形態だけでなく、媒介者としての銀行業者の手に集中し、彼らから利子を取って貸し出される資本という具体的な形態をとっています。マルクスはさらに、この貸し付けることができる monied capital の源泉と運用の形態とを述べたのち、銀行が受けたり与えたりする信用の諸形態とそれを支える準備金とに触れています。このようにこの部分で信用制度の本質が明らかにされ、信用制度が概念的に把握されているわけです。

銀行制度の二つの側面と信用システムの二つの構成部分



(b) 資本主義的生産における信用制度の役割

次の(b)は、エンゲルス版の第27章にあたる部分で、ここでは、信用制度が、資本主義的生産の内部で、この生産にとってどのような役割を果たすのか、ということが、明らかにされています。それは、資本主義的生産様式が信用制度を必然的に生み出さすことになるさいのもろもろの契機、とりわけ、利潤率の均等化をもたらす諸資本の競争を媒介する必要と、流通時間と流通費とをどこまでも減らそうとする資本の傾向とを含んでいます。それにとどまるものではありません。いったん成立した信用制度は、資本の蓄積と集中とを推し進めて株式資本を成立させ、資本主義的生産様式の止揚、すなわち新しい生産様式への前進を準備します。これによって、信用制度が、資本主義的生産という独自の生産様式のなかで、この生産様式にとって、もっている意義が明らかにされました。

なお、マルクスは第5節に「信用。架空資本」というタイトルをつけましたが、このうちの前半の「信用」は、この節の冒頭に信用制度概説を置くことを念頭において書き付けたのではないかと考えられます。そのかぎ

りでは、ここで信用制度が考察されている、とすることができますが、しかしこの考察は、これ以降のところで信用制度のもとでの利子生み資本を分析するための不可欠の準備として行なわれているのでありまして、きわめて限定された論述であるわけです。マルクスは、「信用。架空資本」というタイトルを書き付けたその直後に、「信用制度の分析は、われわれの計画の範囲外にある」と書いて、「信用制度の分析」は『資本論』の範囲外にある、と明言しています。つまり、これからすぐに書く信用制度概説は、「信用制度の分析」に当たるものではないのですよ、とわざわざ注意しているのですね。じっさい、マルクスはここでは、信用制度の細部のメカニズムやその特殊な諸用具等々についてはまったく立ち入っていません。

(2) 信用制度下の利子生み資本 (monied capital) の分析

こうして、monied capital が運動する舞台、環境である信用制度・銀行制度がどのようなものであるかが分かりましたので、今度ははいよいよ、monied capital そのものに向かいます。マルクスは言います。「いまわれわれは、利子生み資本そのものの考察に移る。つまり、利子生み資本が信用制度によって受ける影響や利子生み資本がとる形態の考察に移る」。ここで「利子生み資本そのものの考察」と言っているのは、ここまでの「信用制度概説」で考察したのは、利子生み資本が運動する環境である「信用制度」ないし「信用制度の発展」であって、当の利子生み資本そのものではなかったのだけれど、今度ははいよいよそうした環境のなかで運動する利子生み資本そのものの考察にはいるのですよ、というわけですね。

なお、さきほども申しましたように、エンゲルスは、マルクスのこの言明のなかの、利子生み資本と信用制度という二つのものの位置を逆転させてしまいました。信用制度・銀行制度は、資本の運動、つまり生産的資本や利子生み資本の運動によって、さまざまに発展させられ、あるいは形態を変えていきますが、信用制度・銀行制度は、それ自体として運動し、発

展するような主体ではありません。運動する主体はあくまでも資本であって、資本の運動こそが信用制度・銀行制度を変化させ、発展させるのです。エンゲルスの書き換えは、あたかもマルクスが、信用制度を運動する主体だと見ていたかのように、人を誤らせることになっていた、と言わなければなりません。

さて、このあとマルクスは、I), II), III) という項目番号のもとに、三つの項目に分けて monied capital を分析しています。

ここでやらなければならないのは、さきほども言いましたように、信用制度のもとでの monied capital のもろもろの具体的な姿から、それらの奥に潜んでいる本質的な内的関連をつかみだして、monied capital を「多くの規定と関連とからなる豊かな総体」として脳中に再生産することです。monied capital のとるさまざまの姿は、生産的資本の運動から自立化し、さらに架空化して、内的関連をすっかり覆って見えないものにし、その結果、いたるところで、貨幣市場の当事者たちと経済学者たちの頭脳のなかに転倒した観念を、したがってまた概念上のありとあらゆる「混乱」を生み出しているのですから、ここでの分析は、同時にこのような転倒や混乱を徹底的に批判することでもあるわけです。

monied capital を必然的に生み出して、それを自分の運動の媒介形態にするのは、生産的資本、最も根底的には、産業資本なのですから、monied capital の分析とは、具体的には、この資本の運動が、この資本を生み出した生産的資本ないし産業資本の運動から離れてどのように自立化し、逆に生産的資本の運動にどのように反作用するのか、そしてこのような自立化にもかかわらず、生産的資本の運動によってどのように規定され、制約されているのか、ということを明らかにすることです。産業資本の運動というのは、資本の再生産過程の進行ですし、この進行の具体的な形態は産業循環、景気循環にほかなりませんから、この分析は、monied capital の運動を、再生産過程からこの資本が自立化しながら再生産過程によって最終的に制約される過程として捉えることですし、それはまた同

時に、産業循環の局面転換のなかでの、monied capital の運動と生産的資本の運動との内的関連を明らかにすることでもあります。

そこで、その「(2)信用制度下の利子生み資本 (monied capital) の分析」のところでなにがやられているのか、簡単に見ることにしましょう。

(a) monied capital をめぐる概念上の諸混乱

まず、「(a) monied capital をめぐる概念上の諸混乱」とした部分です。ここでは、トゥックおよびフラートンの見解を手掛りに、monied capital をめぐる経済学上の種々の転倒的な観念とそこから生じている「混乱」とを指摘して、このさきで解明されるべき問題をあぶりだしています。

(b) monied capital の諸形態。架空資本としての monied capital

次の「(b) monied capital の諸形態。架空資本としての monied capital」とした部分で、ここでは、まず、信用制度のもとでの利子生み資本が、銀行業者資本、つまり銀行利潤を自分の増殖分として計算するいわゆる銀行資本ですね、それと、銀行が運用することによって利子を稼ぎだす銀行業資本、英語で言う banking capital という、銀行利潤を目的に運動する資本の形態をとっていることが明らかにされ、銀行業者資本ないし銀行資本がとっている具体的諸形態と、銀行業資本または貸し付けることができる貨幣資本の源泉、要するに monied capital の源泉が分析されています。そして、銀行資本が取っている形態のなかには、利子生み証券などのいわゆる擬制資本が含まれているだけでなく、じつは、銀行の準備金にいたるまで、そのすべての形態が本質的に架空なものであること、架空資本であることが明らかにされます。第5節の表題は「信用。架空資本」でしたが、マルクスがここに「架空資本」と書いていたのは、エンゲルス版第25章の部分ではなくて、ここのところで銀行資本の架空性を明らかにすることを念頭に置いていたものと考えられるのです。

(c) 実物資本との関連における monied capital の分析

最後の「(c)実物資本との関連における monied capital の分析」は、第5節「信用。架空資本」の本論中の本論です。ここでは、第1に、mon-

ied capital の蓄積および不足と実物資本 real capital の蓄積および不足との関連、第 2 に、monied capital の量と一国で流通する流通手段の量との関連、という二つの問題が立てられ、これらについて論じられています。

ここでマルクスがなにをやっているかと言えば、要するに、monied capital がどのように real capital から自立して運動するか、real capital にどのように反作用するか、それにもかかわらず real capital によってどのように制約され、規定されざるをえないか、ということを経済資本の運動の時間的経過のなかで観察し、解明するということなのですね。このなかで、さきに I) で指摘されていましたが「混乱」に決定的な批判が加えられ、またこの「混乱」の根拠が明らかにされます。なお、この部分のあいだには、二回、「混乱」と題された抜粋ないし材料集録が挟み込まれています。この本論中の本論については、もちろん立ち入ってお話しすべきことが山ほどありますが、今日はこれだけにとどめさせていただきます。

(3) 地金の流出入。信用システムの貨幣システムによる被制約性

ところで、monied capital は、あるところまでは自立的な運動を繰り返すことができますが、この運動を究極的に制約するのは、そのうちの一部が、つねに、信用制度・銀行制度における準備金、最終的には中央銀行の金庫にある準備金として、地金の形態をとらなければならない、ということです。そしてこの準備金としての役割を果たすべき地金の量は、一国の資本の再生産過程が、世界市場で、他の国々の資本の再生産過程と関連をもつ結果として生じる、地金の流出入によって影響されざるをえません。ですから、monied capital の運動形態の分析は、最後に、地金の流出入の分析で締め括られるべきだということになります。

そこで、マルクスの草稿では、III) の部分に続く材料集録の部分ののちに、この問題がふたたび本論として書かれています。レジュメで「(3)地金の流出入。信用システムの貨幣システムによる被制約性」としている部分

です。エンゲルス版では第35章にあたる箇所です。monied capital の運動場面である信用制度・銀行制度は信用システム（credit system）の構成部分、あるいはその上層部分をなすものですが、ここでは、この信用システムは貨幣システム（monetary system）を基礎とするものであって、これからけっして離れることができない、ということを論じています。

ここでの論述は、III) での「monied capital と real capital」の考察を締め括るだけでなく、第5節の「信用。架空資本」の全体を締め括り、さらに、『資本論』の枠内での世界貨幣論をも締め括っていると考えることができるであります。

こうして、ここで、利子生み資本の理論的展開が終わります。

B. 利子生み資本にかんする歴史的考察

さて、以上のような、レジュメの「A. 利子生み資本の理論的展開」での、利子生み資本の考察は、約言しますと、産業資本から利子生み資本を理論的に展開するということです。しかし、この理論的展開だけでは、利子生み資本の分析は完結しない。と言いますのは、資本主義的生産様式以前の生産様式が支配している諸社会でも高利資本という利子生み資本が運動していたことは事実としてよく知られていることですの、そのような前資本主義社会における利子生み資本と、いままで理論的に展開してきた、産業資本の派生的形態としての利子生み資本との関係が、まだまったく不明のままに残されているのだからです。この関係を明らかにするのは、もはや利子生み資本の理論的展開ではなくて、利子生み資本の理論的把握にもとづいて行なわれる、利子生み資本にかんする歴史的考察です。

そこで、「B. 利子生み資本にかんする歴史的考察」です。草稿では「6) 先ブルジョア的なもの」、現行版では第36章がこれにあたります。

ここでは、まず、生成しつつある産業資本が、目の前に見いだす大洪水以前の形態における利子生み資本すなわち高利資本を、どのようにして自分のうちにとりこんで、自分の派生的形態として従属させていくのか、

ということが述べられます。

ここではさらに、産業資本に包み込まれた利子生み資本の運動が、産業資本そのものの止揚、つまり乗り越えていくことですね、この止揚によってどのような歴史的役割を果たすことになるのか、ということが述べられています。ここで言う役割は、すでに第27章で明らかにされていた、信用制度の役割の繰り返しではありません。第27章では、信用制度が資本主義的生産様式の内部で、この生産様式にとって、もっている意義が論じられたのにたいして、信用制度の役割は、ここでは、利子生み資本の歴史的生成を明らかにするとともにその歴史的意義を要約する、という第36章の課題にそって、またその観点からなされています。ここでは、成立した利子生み資本が資本主義的生産様式の歴史的な発展傾向にとってもっている意義が明らかにされ、こうして、資本主義的生産様式の歴史的、過渡的な性格が、利子生み資本に即して明示されるのです。いわば、第1部での「資本の本源の蓄積」での「第7節 資本主義的生産の歴史的傾向」に対応する叙述と見ることができるであります。

* * *

以上、第3部草稿の第5章の構成と内容とはこういうものではないか、と私が考えておりますところを話させて頂きました。いろんなことをごたごたと並べたてて、おまえはいったい、なにを言いたかったのか、と首をかしげられる方もいらっしゃるのではないかと思いますので、全体をつうじてつかんでいただければうれしいな、と思っておりましたポイントを最後に申し上げておきます。

いまでも、研究者のなかに、第3部第5章のなかの、最後の歴史的考察を除く、理論的展開の内容を、利子生み資本論と信用制度論という二つの部分からなっているとお考えの方々がかなりいらっしゃるように思いますが、草稿を丁寧に読めば、そうではないのだということがはっきりと分かるはずです。第5章は、じつは、その全体が利子生み資本を対象としてい

るのであって、そこでの理論的展開は、まずもって、利子生み資本を概念的に把握し、次に、それを基礎にして、信用制度のもとでの利子生み資本すなわち *monied capital* を考察する、という順序で進められている、だから、マルクス自身が言っているように、「信用制度の分析」は依然として『資本論』の外に残されているのだ、——これが、今日お話し申し上げたかった最大のポイントであります。

おわりに

『資本論』第3部草稿での第5章から以上のようなことが読み取れるのですが、草稿性のきわめて高いこの章の状態からしますと、マルクスがもっと長く生きることができて、のちにこの章を印刷原稿にまで仕上げる機会をもつことができたなら、彼がこの草稿に、構成においても論述内容においても、徹底的な推敲を加えたであろうことに疑う余地はありません。そのようにして第5章、とりわけその第5節が完成されていたならば、それは、現に私たちの前にある草稿とは大きく異なったものとなっていたことでありましょう。私たちは、草稿第5章を、マルクスの完成した利子生み資本論と見なすのではなくて、あらゆるところでさらに発展させられるべきもの、また発展させる可能性をもったものと見るべきでありましょう。

さて、『資本論』第3部草稿の第5章から私が読み取りました内容と構成とは、おおよそ以上のようなものですが、エンゲルス版だけで第3部でのマルクスの利子生み資本論を読んでいるかぎりには、このような理解に到達することはとうてい不可能でありました。そこで、私のこのような理解は——今日は具体的に触れる余裕がまったくありませんでしたが——、エンゲルス版を読んで自分の理解を形成し、議論を闘わせてこられた多くの研究者の方々の見解とは、いくつもの基本的な論点で大きく対立することになりました。いまでも、今日、お話ししましたような私の理解が一般的

に受け入れられているわけではありません。私にたいする異論をはっきりと書かれている研究者が何人もおられます。

それにもかかわらず、私が『経済志林』に発表して参りました一連の論稿では、マルクスの第5章の内容と状態を、すでに活字となっておりますMEGA版とは、またひと味違った仕方でご覧いただけるようになっていて、それらは今後も引き続き、関心をおもちの皆さんにご利用いただけるのではないかと、そのかぎりでは、私のこれまでの、怠慢きわまりない21年間も、あながち無駄ばかりではなかったかもしれない、と自らを慰めている次第です。

最後に、一言、申し上げます。『資本論』第3部草稿の第5章を考証的に分析して紹介するという仕事に着手し、そしてそれをともかくも終えることができましたのは、経済学部に着任して6年目の1980年から1982年までの2年間、在外研究に出していただき、さらにその後今日にいたるまで、いつでも、またどんな制約もなく、拙稿を『経済志林』に掲載させてくださった、経済学部とその同僚の皆さんのおかげでした。心からお礼を申し上げる次第です。

31年間にわたる法政大学での生活では、いい同僚の皆さんといい職員の皆さんといい学生諸君とに恵まれ、教育についても研究についても、自分の思うように振る舞ってすることができました。このことについても、学部教授会の皆さんと職員の皆さん、そして学生諸君とOBの皆さんに、心から感謝いたします。

このつたない長話に、最後まで、我慢してお付き合いくださいました皆さんに、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

本講義関連の既発表拙稿

	タイトル	掲載刊行物	刊行年
1	『資本論』第3部第1稿について	『経済志林』第50巻第2号	1982年
2	「貨幣取扱資本」(『資本論』第3部第19章)の草稿について	『経済志林』第50巻第3・4号	1983年
3	「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)	『経済志林』第51巻第2号	1983年
4	「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)	『経済志林』第51巻第3号	1983年
5	「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(下)	『経済志林』第51巻第4号	1984年
6	『資本論』第3部第5篇の草稿について	『信用理論研究』第1号	1984年
7	「経済学批判」体系プランと信用論	『資本論体系』6「利子・信用」有斐閣	1985年
8	「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第3部第27章)の草稿について	『経済志林』第52巻第3・4号	1985年
9	『資本論』における信用の役割	『信用理論研究』第3号	1986年
10	「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について	『経済志林』第56巻第3号	1988年
11	「利潤の分割」(『資本論』第3部第22章)の草稿について	『経済志林』第56巻第4号	1989年
12	「利子と企業者利得」(『資本論』第3部第23章)の草稿について	『経済志林』第57巻第1号	1989年
13	「資本関係の外面化」(『資本論』第3部第24章)の草稿について	『経済志林』第57巻第2号	1989年
14	「貨幣資本の蓄積」(『資本論』第3部第26章)の草稿について	『経済志林』第57巻第4号	1990年
15	「流通手段と資本」(『資本論』第3部第28章)の草稿について	『経済志林』第61巻第3号	1993年
16	『資本論』第3部第1稿のMEGA版について	『経済志林』第62巻第2号	1994年
17	「銀行資本の構成部分」(『資本論』第3部第29章)の草稿について	『経済志林』第63巻第1号	1995年

18	『資本論』第3部草稿に見るマルクスの 利子生み資本論——第3部MEGA 版が明らかにするもの——	『経済研究年報』（大阪経済 法科大学）第14号	1995年
19	コメンタール「第5篇 利子と企業者 利得とへの利潤の分裂 利子生み資 本」	『マルクス・エンゲルス・マ ルクス主義』第28号	1996年
20	「貨幣資本と現実資本」（『資本論』第 3部第30—32章）の草稿について ——『資本論』第3部第1稿の第5章 から——	『経済志林』第64巻第4号	1997年
21	「信用制度下の流通手段」および「通 貨原理と銀行立法」（『資本論』第3 部第33章および第34章）の草稿につ いて——『資本論』第3部第1稿の第 5章から——	『経済志林』第67巻第2号	1999年
22	『資本論』の著述プランと利子・信用 論	『経済志林』第68巻第1号	2000年
23	「貴金属と為替相場」（『資本論』第3 部第35章）の草稿について——『資 本論』第3部第1稿の第5章から——	『経済志林』第69巻第3号	2001年
24	「資本主義以前」（『資本論』第3部第 36章）の草稿について（上）——『資 本論』第3部第1稿の第5章から——	『経済志林』第69巻第4号	2002年
25	「資本主義以前」（『資本論』第3部第 36章）の草稿について（下）——『資 本論』第3部第1稿の第5章から （完）——	『経済志林』第70巻第3号	2002年

『経済志林』掲載論稿正誤表

以下に掲げるのは、これまでに『経済志林』に掲載されたすべての拙稿の正誤表をまとめたものである。

これまでも、活字となったのちに訂正すべきと考えた箇所は、気付くたびに、その後の関連する拙稿の末尾に「訂正」ないし「正誤表」のかたちで公表してきた。論稿によっては、訂正箇所を何度も追加したものもある。そのために読者から、拙稿のなかの、とくにマルクス草稿を紹介した部分については、論稿ごとに訂正箇所をまとめたものがほしいという要望が寄せられていた。そこで、法政大学経済学部から離れるこの機会に、正誤表を一括して提示することにした。さまざまな機会に誤りをご指摘くださった皆さまに心からお礼を申し上げる。

もちろん、以下の膨大なリストは、それぞれの論稿の校正のさいに筆者がいかに注意力を欠いていたか、いかにずさんな校正で済ませてきたか、ということを示す、赤っ恥のオンパレードである。本音を言えば、こんなものを発表したくはない。しかし、読者に多くの誤りを含むものを見せたままになっていることへの良心の痛みもさることながら、さらに、拙稿の多くにはマルクスの『資本論』草稿の紹介が含まれており、とくにMEGAに収録されていない部分の紹介については、読者にたいする重い責任を負っている。あえて自らの不面目をさらすことにした次第である。

このなかでもとくに、1981年に発表した拙稿「『蓄積と拡大再生産』（『資本論』第2部第21章）の草稿について」（上・下）では、以下に見られるように、膨大な量の訂正箇所を挙げてある。この拙稿は、アムステルダムで筆者がはじめてマルクスの草稿に取り組んで得たものからまとめて、原稿を日本に送ったものであったが、訂正すべき箇所のこのような多さは、当時の筆者がマルクスの筆跡の解読にいかに未熟であったか、またとくに、ドイツ語の語形変化にいかに鈍感であったかを如実に物語っている。このようなリストの公表は、筆者のこれまでの草稿紹介の内容への信頼を大きく損なうことは明らかだから、率直に言って、こういうかたちで筆者の当時の力量不足をさらけ出すことには——このリスト自体はすでにかなり前に作成していたのであったが——かなり迷った。しかし、この部分を収録するMEGA第2部第11巻はまだ刊行されていないので、『資本

論』第2部第8稿の内容については拙稿によって論じておられる方もあり、またそのような方のなかには、この旧稿の正誤表をどこかに載せていないか、と問い合わせてくださった方もあった。そういうわけで、他の拙稿の正誤表とともに、この機会に公表に踏み切ることにした。不幸中の幸いは、訂正が必要な箇所のこの多さにもかかわらず、第8稿の第21章部分がマルクスの草稿ではどのようなになっていたか——したがってまたエンゲルス版はそれとどのように違っているのか——ということを読者にお伝えしようという、拙稿の当初の目的そのものを決定的に損なうような訂正箇所はほとんどなかったと判断できることである。

旧稿に使ったのは、アムステルダムの社会史国際研究所蔵の『資本論』第2部第8稿とその photocopy であったが、のちに、第2部第5～8稿を MEGA 第2部第11巻に収めるための編集作業を筆者が引き受けることになり、その作業のなかで第8稿のテキストを作成した。ここに掲げる正誤表は、そのテキストと旧稿とを照合して、旧稿のなかで訂正されるべき箇所のうち目についたものをまとめたものである。ドイツ語原文の解説で訂正すべきところに対応して、訳文のほうでも訂正が必要となったところを記載している。あわせてその他の誤記・誤植の箇所も記載した。利用の便宜を考えて、この二つの拙稿についての正誤表だけは、ドイツ語原文と訳文とに分けて掲げてある。

「カール・マルクス『論評』——貨幣、信用、恐慌に関する1851年の一論稿——」
 (『経済志林』, 第46巻第2・3号, 1978年10月)

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
295	右	2	【タイトル】 論評	【本稿を『マルクス＝エンゲルス全集』補巻3（大月書店、1981年）に収めるさいにタイトルを次のように変更した】省察
〃	左	7	はじめて	【削除】
298	右	2	復写	複写
317	右	5	〔した場合〕	〔した場合でさえもの〕
〃	左	7	第一の	前者の
〃	〃	6	第二の	後者の

「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上) — 『資本論』第2部第8稿から — (『経済志林』, 第49巻第1号, 1981年7月)

原文

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
32	上	14	Buch	Bd.
"	下	9	individuellen Kapital	individuellen :Waaren: Kapital
34	上	9	: nachdem sie :	: dazu. Indem sie :
"	"	13	wird	und
36	下	3	Eintritt d. Circulation	Eintritt in Circulation
"	下	2	der A.	des A.
37	上	1	würde	werde
"	"	4	deten:	deter:
"	"	"	ober	oder
"	"	7	Geld Gold	Geld
"	"	11	rather wenig	rather minus
"	"	13	potentielle Geld	potentielles Geld
"	下	11	2) Geld も……おく。	2) ここに誤ってもう一度 Geld と書いている。
39	下	6	Mehrprodukts	Mehrwerths
"	"	5	hier	sein
"	"	3	Form	forma
41	下	14	zur	【zu とあるべきところを誤記】
"	"	11	slchatzten	schatzten
43	上	4	sie	i.e.
"	"	12	etc. etc.	etc ab
45	上	2	Seine	Diese
"	下	2	werft	wirft
47	下	3	z.B.1)	【削除】
"	"	2	Bestandtheils	Bestandtheile
48	上	6	der entspricht	dem entspricht
"	"	7	c.II, des	c.II, (des
"	"	8	niederschlägt,	niederschlägt),
"	"	13	(I) im	(I) in

"	下	13	注1)	【削除】
51	上	9	Ware	Waare
"	"	10	von I, die	von I, sie
52	下	8	Kapitaltheils	Kapitalwerths
"	"	7	Ersatz	Ersetzung
"	"	1	$A-G (=W-G)$	$A_G (=W_G)$
53	上	1	Kapital I:	Kapitalisten I;
"	"	"	Waaren d.	Waaren v.
"	"	5	(vI),	(vI) von
"	"	9	Waaren, des	Waaren (des
"	"	10	$(v+m)I$	$(v+m)I(<)>$
"	"	14	anormalen	anormalem
55	下	13	sein	seine
"	"	"	in	im
"	"	12	Waaren	Waare
"	"	8	fertigen od unfertigen	fertigem od<.> unfertigem
56	上	6	Kapital, aber	Kapital (aber
"	"	7	etc. (I).	etc (I)<)>.
"	"	13	gabte	gabte.
57	下	12	virtuellen surplus constanten	virtuellem Surplus-constantem
"	"	11	virtuellen neuen	virtuellem neuem
"	"	10	zusätzlichen	zusätzlichem
"	"	9	kapitalistische	zusätzliche
58	上	4	additionellen	additionellem
"	"	8	realiter	vielmehr
59	上	12	Das Geld	Dies Geld
"	下	11	Metalle	Metalls
60	下	15	da der Zeugnere	den der 【この der は消し忘れ】 Zeuger
"	"	11	darge-	dar-
"	"	7	additionelles	additionellen
"	"	5	näm.	viz.
"	"	4	dies	das
"	"	2-1	注1)	【削除】

61	下	13	aneignet	angeeignet
"	"	11	ist, -func-	ist, es func-
"	"	10	tionirt das actuell	tionirt actuell
"	"	4	zum Profit als zur „Revenue“	zu Profit als zu „Revenue“
"	"	3	in Creditssystem	im Creditssystem
"	"	"	„Papieren“	„Papiercher“ 【„Papierchen“ の誤記】
62	下	14	real	viel
"	"	"	virtuellen	virtuellem
"	"	13	virtuellen	virtuellem
"	"	12	:vergewandelten:	:unproductiven:
63	上	2	Andererseits. Bei	Andererseits, bei
"	"	8	:(Geld):	:Geld:
64	上	5	da aber	da wir
"	下	11	besprechen	bemerken
66	上	4	Waaren	Waare
"	"	"	weiter,	vorher,
"	"	6	herkommen,	herkomme,
"	下	5	das	dies
68	下	15	erweiterter	erwähnter
"	"	4	bleibt. Einerseits	bleibt. 【ここで改行】 Einerseits
69	上	5	grösseres	grösserer
70	上	9	(ihr	(der
71	下	13	Pour ce moment	Pour le moment
"	"	10	verwandeln. Es	verwandeln. 【ここで改行】 Es
72	下	13	letzteren	letzterem
"	"	12	Element	Elemente
"	"	8	einmal	einemal
73	下	3	auf Form	aus Form
74	上	2	- nun	- wenn
"	"	5	Waare	Waaren
"	"	6	virtuellen zusätzlieh	virtuellem zusätzlichem
"	"	15	Reproduction	„Reproduction“
75	下	8	Nun A (I)	A (I)

”	”	7	dem constanten	dessen constantem
76	上	5	Reproduction hence	Reproduction aus, hence
77	上	5	folgende	folgendes

和 文

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
18	下	1	432	492
22	上	1	感ちがひ	勘違い
25	下	11	表示展開	表式展開
32	上	1	第 1 部	第 1 巻
”	”	7	個別資本	個別商品資本
33	上	1	それに加えて, 100m が	100m がそれに加えられる。それは,
”	”	2	された《のちに》 ¹⁾	されることによって
”	”	4-5	られるが	られ, しかも
”	下	3-2	注1)	【削除】
35	下	9	されるところの場合	される場合
”	”	3	貨幣である金	貨幣
36	上	3	もっと小さく	マイナスに
38	下	6	剰余生産物	剰余価値
”	”	5	ここでは	【削除】
42	上	2	引きあげて貨幣	引きあげる, すなわち貨幣
”	”	10	等々によっても	等からも
44	下	9	彼が	このように
46	下	9	固定成分	固定諸成分
”	”	2	販売, すなわち	販売 (すなわち
”	”	1	販売を	販売) を
51	下	6	可変資本部分	可変価値部分
52	上	9	1 部分の, すなわち	1 部分の (すなわち
”	”	10	v 部分の	v 部分<) > の
54	上	12	する。しかし	する。 (しかし
”	”	14	である。これは	である。<) > これは
57	上	8	資本家が	追加的に
”	下	2-1	実体的に言えば [realiter]	むしろ

59	下	7-5	(それに合体された労働力を含めて、 というのは、それは剰余生産物の創り手、 剰余労働の創り手であるから)	(剰余生産物の創り手、剰余労働の 創り手である、それに合体された労働力 を含めて)
62	上	6	現実の拡大	大きな拡大
"	"	8	《転化された》	《不生産的な》
"	下	6	《(貨幣)》	《貨幣》
63	下	12	というのは、	というのは、われわれは
64	上	10	言って	注意して
65	下	8	(I)がそれを引き継いで	(I)がまずもってそれを行ない
67	上	10	広汎な1)	すでに述べた
"	下	7	である。このあとの	である。【改行】このあとの
68	上	2	注1)	【削除】
69	下	12	(最も本源的な	(本源的な
71	上	2	ならない。)"同様に	ならない。)"【改行】同様に
73	上	5	すなわち	【削除】
"	"	6	引きあげることによって	引きあげれば
"	下	15	再生産を	「再生産」を
74	下	5	ところで、	【削除】

「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(下) — 『資本論』第2部第8稿から — (『経済志林』, 第49巻第2号, 1981年10月)

原文

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
3	上	2	II, findet	II findet
"	下	9	zurückkehrte — die	zurückkehrte. Sie
5	上	15	I od. II	I u. II
6	上	2	befähigt, mit	befähigt mit
"	"	4	ganzen	ganze
7	下	12	Waarenvorrath von ihm	Waarenvorrath ihm
"	"	11	ihren ¹⁾	ihren
"	"	10	Ausdrücke	Ausdruck
"	"	2	specifischen	specifisches

"	"	1	der Rearrangement	dem Rearrangement
8	上	4	註1)	(削除)
10	下	13	b)	a) (b)の誤記]
12	上	5	erörterte	erörtert
"	下	3	runden	graden
13	下	2	muss. 60	muss. 【ここで改行】 60
15	下	11	also in	um so in
"	"	5	Schmus	Schmu
16	下	3	ihr	der
"	"	2	v. :den:	der
17	上	7	Schmus'	Schmu's
"	"	14	neu	uns
18	下	7	fassbarer	fassbaren
19	上	12	extraordinär	extraordinair
"	下	9	ein	die
20	下	11	normalen	normalem
"	"	10	tanto	rata
"	"	"	Parteien	Partien
21	上	1	xxxxx	vermittelt
"	下	13	Geld rauf	Geldraub
"	"	8	positiven	positivem
24	下	13	100m als	100m (als
"	"	8	Mehrwerth	Mehrwerths
25	上	8	sum	Summe
27	上	8	II, durch	II (durch
"	"	9	550 (II) ,	550 (II) (<) >
"	下	12	c : v	v : c
29	上	9	Transpositionen	Transpositions
30	下	12	vorigen	vorigem
31	上	4	868 4/3	868 3/4
"	下	3	154 11/16 c Capital	154 11/16 c. Capital
"	"	"	weiter	weiteres
34	上	5	= const.	= lassen wir d. Brüche, da es darauf nicht ankommt, weg = 704; ferner braucht aber II) für d. 174 mehr const.

"	"	7	erhalten, indem	erhalten (indem
"	"	"	weglassen:	weglassen<)> :
"	"	10	2262	3262
35	上	2	Hälfte d.	Hälfte v.
"	"	6	98v (in	98v + (in
37	上	4	=28	=98
"	"	14	well	viel
38	上	7-8	verdoppelt. Uebrigens	verdoppelt. 【ここで改行】 Uebrigens
"	下	6	Ich	Ist
40	上	4	4400	4500
"	"	7	1 : 7. D.	1 : 7. 【この下に横線が引かれている】 【ここで改行】 D.
"	下	10	theilnahm	Theil nahm
41	下	5	1800 (II); Damit	1800 (II). Damit
42	上	17	v; dann	v; hat dann
43	上	2	II). II)	II) 【ここで改行】 II)
"	"	3	auch	noch
"	"	"	zusetzen. Also	zusetzen. 【ここで改行】 Also
45	上	13	damit	direct
46	上	15	wie	wäre
"	"	16	xxxxx xxxxx ¹⁾	wo selbes eintritt
"	下	9	Differences dieses	Difference dieser
"	"	6	1600	1800
"	"	2	註1)	【削除】
47	下	7	(+ d. Consumtionsfonds	(+ in Consumtionsfonds
"	"	5-4	variablen	variablem
49	上	13	Mehrwerths	Mehrprodukts
"	"	14	könnte	kann ihn
"	下	13	mitten	within
"	"	12	ihr	ihm
51	上	12	wie	worin
"	"	14	Gelegenheit, so	Gelegenheit. So
"	"	"	Bericht der	Bericht des

52	上	1	demagogues	demagogue
"	"	2	(404,	(p.404,
"	"	3	H.M.'s	H.M's
"	下	7	Vermögens	Vermögen
"	"	2	consumiren <">	consumiren"
53	上	3	Hausvermieter	Hausvermieter
54	下	8	p.410, xxx	p.410, 11
"	"	6	rules. :Davon	rules. <"> :Davon
"	"	4	jeder	jedes
"	"	3	dürfen	darf ein
"	"	2	aus & ein	aus sein
55	上	1	bestappointed	best appointed
"	"	8	bes. with	besuchte
"	下	11	Arbeiter sei	Arbeiter zu
"	"	10	market for ¹⁾ things	market <"> for „things
"	"	8	注1)	【削除】
58	上	6	verzusetzende	umzusetzende
"	下	10	zusätzlichen constanten	zusätzlichem constantem
59	上	1	Ankäufe	Ankauf 【最後の t は不要】
"	下	4	Wiedereinigung	Wiederincorporing
62	下	14	+1000	+5000
"	"	1	1/8	1/5
63	上	3	Mehrwerth	Mehrwerts
"	"	8	I) 500=	c) I) 500=
"	"	10	118m(II). Ferner	118m(II). 【ここで改行】 Ferner
"	"	12	letzt	lässt
"	下	6	die	dies
"	"	3	nachd.	nach d.
65	下	1	(II ad) lässt 250. U.	(II) ab lässt 250, u.
67	下	6	bleibt 288	bleibt: 288
"	"	5	268(II)	208(II)
"	"	3	6200 + 1220=	6200 + 1220
68	下	10	Betracht: u.	Betracht; u.

"	"	9	Betracht: d.	Betracht d.
"	"	8	xxxxx wir an	angenommen
"	"	"	constantes	constant
70	上	1	diesem	diesen
71	上	3	beide	Ende
"	"	7	shall to be golded	still to be gilded
72	下	7	einfache	einfachen
"	"	4	share	etwa
73	上	6	Berechnungen	Beziehungen
"	"	7	reproducirtes	reproductiv
"	"	8	Samen	Saamen
"	下	3	<ein> ander	einander
74	上	9	I u. to	I is to
77	下	5-4	od, rather zu d. Wiederersatz	od. rather zum Wiederersatz
78	上	6	hat. Es	hat. 【ここで改行】 Es
"	下	14	u. bei d.	u. für d.
"	"	11	erweiterter	erweiterten
"	"	9	werden	zwar
"	"	8	Inhaber	Inhabern

和 文

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
4	上	9	I または II	I および II
6	下	7	II の側が去年から持ち越し	前年から II に引き渡され
10	上	9	一方の b) の	一方の a)【b) の誤記】 の
13	上	4	ちがいない。 60	ちがいない。【ここで改行】 60
15	上	5-7	また、流通から引きあげられることもできないのであり、したがって蓄蔵貨幣の形態で可能的な新貨幣資本を形成することはできないのである。	また、蓄蔵貨幣の形態で可能的な新貨幣資本を形成するために流通から引きあげられることもできないのである。
"	下	9	儲け口 ¹⁾	掠め取り
"	"	8-7	注1)	【削除】
"	"	1	彼らの労働力	労働力

〃	〃	9	儲け口	掠め取り
16	上	14	いま新たに	いまわれわれが
20	下	5	《xxx ¹⁾ 》	《媒介的に》
〃	〃	3-2	注1)	【削除】
26	上	13	でも、550 _(m) I)と	でも、(550 _(m) I)と
〃	〃	〃	交換によって	交換によって<)>
〃	下	5	c : v	v : c
33	下	12	であり、この不変資本	であり、分数部分はどうでもいいのだからこれを切り捨てれば704である。だがIIはさらに174だけ多い不変資本
〃	〃	9	そして、すべての分数部分を切り捨てれば、われわれは	すると（すべての分数部分を切り捨てれば）われわれは
〃	〃	2	2262(c)	3262(c)
36	下	14	28	98
〃	〃	8	28	98
37	上	8	《ゆうに ¹⁾ 》	《はるかに》
〃	〃	10-12	注1)	【削除】
〃	下	10	大した。なお、	大した。【ここで改行】なお、
38	上	11	私は	【削除】
〃	下	2	4400	4500
39	上	3	である。総可変資本	である。【この下に横線が引かれている。】【ここで改行】総可変資本
42	下	11	ならない。) IIは、	ならない。)【ここで改行】IIは、
〃	〃	10	をも追加	をさらに追加
44	下	7	と転換される	と直接に転換される
45	下	12	xxxx ³⁾	同じことが生じるときには
〃	〃	4	1600	1800
46	上	4-6	注3)	【削除】
47	上	5	消費ファンド1500	消費ファンドで1500
48	下	12	剰余価値	剰余生産物
〃	〃	10	IIによって補填される	IIによってそれを補填する
53	上	12	410ページ、xxx ¹⁾	410、411ページ
〃	下	3-2	この点に関心をもっている	この会社を訪れた

54	上	7	労賃の引上げ	労賃の引下げ
"	"	9	物のための市場	物<」>のための「市場
"	"	11-12	注1)	【削除】
56	下	7	置き換えられる	転換される
59	下	12	再合併	再合体
60	上	4	+1000 (貨幣)	+5000 (貨幣)
"	下	11	1/8	1/5
"	"	3	I) の	c) I) の
61	上	1	である。さらに、	である。【ここで改行】さらに、
"	"	2	になる。83	になる。そこで、 83
"	"	4	最後に	【削除】
"	"	15	1/8以上	1/5以上
66	上	14	これは I によって	これは I から
"	下	10	268m (II) が残る。	208m (II) が残る。
68	上	10	仮定した ¹⁾ 。	仮定した。
"	"	12-13	注1)	【削除】
70	上	10	2 ページ	ページの終り
"	"	15	貨幣化	まだ金メッキ
71	下	11	1500m の分け前にあずかって	たとえば 1500m によって
"	"	1	II 自身によって再生産されるもの	それ自身再生産的で
72	上	1-2	計算	連関
76	下	7	はない。問	はない。【ここで改行】問
77	上	5	資本はまず	資本はもちろんまず
78	下	1	1980年	1981年

『『資本論』第3部第1稿について——オリジナルの調査にもとづいて——』（『経済志林』、第50巻第2号、1982年10月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
93	下	6	ほである	ほどである
99	上	8	片側	片面
"	"	10	反対側	裏面
104	上	15	„54/2“	„A54/2“
"	上	20	引用中の「旧目録」という語に	引用に

112	下	5	商品価格	商品の生産価格
113	上	1	第3章は	【先頭を1字空ける】
119	下	6	двойные	двойные
126	上	9	Produktionzeit	Produktionszeit
"	"	14	Product-	Produkt-
132	下	11	„ausbieten“	„ausbieten.“
"	"	6	Circulationsprozeß	Circulationsprozeß
135	下	2	390	390－
137	上	9	382	352
138	下	3	第2稿	第1稿
140	上	3	Die	Der
151	上	11	第3節	第4節
153	上	13	Die	Der
156	上	4	諸問題について	問題によせて

「『貨幣取扱資本』（『資本論』第3部第19章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿から——」（『経済志林』，第50巻第3・4号，1983年3月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
(282)	上	6	4) 貨幣取扱資本。	/275/4) 貨幣取扱資本。
"	下	6	もっと詳しく言えば	もっと詳しく言えば，
(285)	下	9	この労働は，	この操作は，
(286)	下	3	Funktion	Kapitalfunktion
(290)	上	9	ヴィッセリング	フィッセリング
(291)	上	2	ヴィッセリング	フィッセリング
(292)	下	13	C)	c)
(293)	下	15	ausgedrückt	ausgedrückt
(295)	下	10	ヴィッセリング	フィッセリング
(296)	下	2	ヴィッセリング	フィッセリング
(304)	上	1	(sachlich))	(sachlich))
"	"	12	(bei ihnen))	(bei ihnen))

「『信用と架空資本』（『資本論』第3部第25章）の草稿について（上）——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』，第51巻第2号，1983年10月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
5	下	3	仮空	架空
19	下	1	1957年と1958年	1857年と1858年
22	下	8	1984年	1884年
"	"	"	1985年	1885年
"	"	5	1985年	1885年
"	"	3	1994年	1894年
29	下	9	最も	もっとも、
30	上	11	きでき上がったも	き上がったも
40	上	5	bullion	Bullion
44	上	12	かぎりでのみ	かぎりでのみ
"	"	13-14	anzuwend- nden	anzuwen- den
46	下	21	359	369
"	下左	18	分裂	分割
"	"	12	利子生み資本における	利子生み資本の形態における
"	"	11	資本一般の	資本関係一般の
"	下右	20	359	369
"	"	19	利子の分割	利潤の分割
47	上	9	Theilung	Theilung
50	下	1	はじめところ	はじめのところ
52	下右	5-4	現実資本と貨幣資本	貨幣資本と現実資本
"	"	2-1	現実資本と貨幣資本	貨幣資本と現実資本
58	下	6	第5章の	第5章の「5」の
60	下	9	20行目	26行目
70	下	5	567	577
75	下	11	『通貨理論論評』	319下④ 『通貨理論論評』
77	下	13	通貨，貨幣，資本。	321⑨ 通貨，貨幣，資本。

「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（中）——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』，第51巻第3号，1983年12月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
7	上	6	29ページ。())/	29ページ。())「この〔信用〕取引が通例であって、現金取引は商業での例外である。」(同前)/
20	下	2	Besitztiel	Besitztziel
31	上	7	Reserverfonds	Reservefonds

「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（下）——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』，第51巻第4号，1984年3月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
22	下	5-4	鑄貨，貨幣，貨幣資本としての流通手段と利子生み資本	鑄貨としての流通手段，貨幣，貨幣資本，利子生み資本

「資本主義的生産における信用の役割」（『資本論』第3部第27章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』，第52巻第3・4号，1985年3月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
(34)	下	14	利子	<u>利子</u>
"	"	5	結合された	結合した (associiert)
(35)	上	12	新しい <u>金融貴族</u>	<u>新しい金融貴族</u>
(38)	上	5	Unternehmungsprojektors	Unternehmungsprojektors
"	"	15	資本主義的産業	資本主義的私的産業

「利子生み資本」（『資本論』第3部第21章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』，第56巻第3号，1988年9月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
1	上	3	No.2	No.3
"	"	10	本は」，	本」は，
3	上	13	と呼ぶ。」	と呼ぶ。）
11	上	15	S. 175-176	S. 173-174
"	"	15	S. 178	S. 176

19	上	14	1984年版	1894年版
27	下	8	より古風なもの	古風なもの
28	上	7	より古風なもの	古風なもの
41	下	3	capitalists	capitaliste
43	上	4	94ページ	44ページ

「[利潤の分割]」(『資本論』第3部第22章)の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」(『経済志林』, 第56巻第4号, 1989年3月)

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
1	上	3	1988	1989
9	下	6	利潤の平均	利子の平均
13	上	9	活気の増大	が活気の増大
16	下	5	企業利得	企業利潤
26	下	9	期間については,	期間について,
28	下	10	rektifiziren	rectificiren
29	上	15	——削除。	【削除】
31	上	15	貸し手	借り手
32	上	4	貸し手	借り手
34	下	6	証明, 形態。」	証明, 形態。」【「形態」という語は「証明」という語の上に書かれている。】

「[利子と企業者利得]」(『資本論』第3部第23章)の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」(『経済志林』, 第57巻第1号, 1989年6月)

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
59	下	3	誤語	訳語
69	下	8	対応する「)」	対応する「(」
70	上	12-13	なお, gross はもともと net とすべきところだったのであろう。	【削除】
92	上	10	所有者	所有
102	上	8	エンゲルル	エンゲルス
104	上	12	監督労働が	監督労働が
112	上	7	Kreditwesen	Creditwesen
”	”	14	Kreditwesen	Creditwesen

「『資本関係の外面化』（『資本論』第3部第24章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』，第57巻第2号，1989年7月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
64	上	1	貨幣，資本，価値	貨幣，商品，価値
67	上	1	37)	38)
"	"	6	38)	37)
"	下	14-13	生産過程	再生産過程
93	下	1	1988年	1989年

「『資本論』第2部および第3部の執筆時期の関連についての再論——第2部第1稿についてのMEGA付属資料を読んで——」（『経済志林』，第57巻第3号，1989年12月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
184	上	10	外観——』	外観——」

「『貨幣資本の蓄積』（『資本論』第3部第26章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』，第57巻第4号，1990年2月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
139	上	9	『資本論』	『『資本論』
173	上	8	にたいるす	にたいする

「『現存社会主義』は社会主義か」（『経済志林』，第58巻第3・4号，1991年3月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
3	下	8	大きく五	大きく四
19	上	10	資本主義	社会主義

「『労働を基礎とする社会把握と経済学の課題』（『経済志林』，第61巻第1号，1993年6月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
67	上	8	ジェヴォンズ	マーシャル
71	下	4	激烈な	これらの政権はあからさまな
74	下	8	価値が労働の実体	労働が価値の実体
89			【第13図最下行】ある量の労働	ある量の支出

「商品および商品生産」（『経済志林』，第61巻第2号，1993年9月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
60	上	1	活動であり	活動である
75	下	2	われわれに	われわれが
83	下	6	750mg (zmg)	750mg (zg)
103	上	2	という見る	と見る
104	下	5	人間的労働	人間労働
112	上	11	第45図	第46図
131	下	11	価値の実現	価値としての実現
135	下	6	広がり	広がり
136	下	12	商品種類	商品価値
138	上	15	交換と	交換価値と
144	下	4	いくつか側面	いくつかの側面
145	上	9	いなる	いかなる

「価値形態」（『経済志林』，第61巻第2号，1993年9月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
164	上	14	「諸商品の関係」	「さまざまな商品の関係」
168	上	4	1着の上着＝20エレのリンネル	20エレのリンネル＝1着の上着
176	上	9	貨幣の秘密	貨幣形態の秘密
178	上	3	反比例する	反比例する
193	下	11	§2	第2節
197	下	11	ものはない	ものではない
”	”	2	について	につれて
200	上	6	リンネル価値	リンネルの価値
”	”	7	茶価値	茶の価値
201	上	8	単独な	単純な
209	下	12	どれが	それが
214	上	7	関価値	関わる価値
216	下	13	交換価値	価値
221	上	12	一般的等価形態	一般的等価形態は
224	上	1	zmg	zg

「流通手段と資本」（『資本論』第3部第28章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』，第61巻第3号，1993年12月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
205	上	1	"Capital	"Capital
"	上	2	"Means	"Means
210	上	6	505ページ3行目	505ページ33行目
212	上	7	の区別はそして	の区別は，そして
"	"	8	⁴⁾ 【2箇所】	【削除】
"	"	9	⁵⁾	⁴⁾
"	"	9	())	のであるが
"	下	10	多面	他面
214	上	2-22	1994年版【8箇所】	1894年版
215	下	8	注4)	【削除】
"	"	7	5)	4)
"	"	4	capital	Capital
"	"	2	流通手段	流通手段のあいだの諸区別
216	上	2	注6)	【削除】
263	下	5	占有権限	占有権原
264	上	1	資本権限	資本権原
271	上	8	中断	<u>中断</u>

「貨幣の機能」（『経済志林』，第61巻第4号，1994年2月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
200			【第1図】 zmg	zg
"			【第1図】 — =100円	— =10円
207	上	5	貨幣所持者	商品所持者
216			【第16図】 ①観念的購買手段	②観念的購買手段
"			【第16図】 ②価値尺度	①価値尺度
233	下	12-13	紙幣量の限度を突破して	紙幣量にその限度を突破させて
234	下	2	等置させる	等置される
236	上	10	使用価値の実現	使用価値としての実現
"	"	"	価値の実現	価値としての実現
277	上	8	通用再軽量目	通用最軽量目

「『個人的所有の再建』と『社会的所有』——『1861-1863年草稿』での覚え書を手掛りに——」（『経済志林』、第61巻第4号、1994年2月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
283	下	4	始めて	初めて
285	下	12	ことに通じて	ことを通じて
289	下	3	生産が	生産を
292	下	13	収奪	利用

「『資本論』第3部第1稿のMEGA版について——MEGA第2部第4巻第2分冊の付属資料を中心に——」（『経済志林』、第62巻第2号、1994年9月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
245	上	1	of Karl Marx	by Karl Marx
255	上	10	あとの三つの断稿にそれぞれ「II」, 「III」, 「IV」という	あとの三つの断稿のうちの二つにそれぞれ「II」, 「III」という
257	上	11	〔異文目録	異文目録〔
”	”	12	〔訂正目録	訂正目録〔
”	”	”	〔注解	注解〔
266	下	8	第25～27章	第25～26章
267	下	9	第4章	第5章
”	”	10	第5章	第6章
”	”	11	第6章	第7章
268	下	14	第5に	第6に
270	下	2	194	294

「貨幣の機能（II）」（『経済志林』、第62巻第3・4号、1995年3月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
239	下	9	第3部第28章	第3部第28章)

「『銀行資本の構成部分』（『資本論』第3部第29章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』、第63巻第1号、1995年7月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
4	下	6	「II」以降の	「III」以降の

17	上	5	[mortgages]	[mortgages]
31	上	9	S. 268.19	S. 263.19
52	下	7	57ページ	59ページ

「社会主義とはどのような社会か」(『経済志林』第63巻第3号, 1995年12月)

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
63	上	11	各人は	各人には
70	下	11	だとして	だとして
77	上	2	協同組合組織	協同組合的組織
84	下	7	なにも	実質的になにも
93	上	14	変するすること	変すること
102	下	11	なかも	なかに
117	下	7	招集者	少数者
119	上	1	のももとの	のももとの
122	下	7	よったまた	よってまた
129	上	13-14	Gesellschaft -sunternehmungen	Gesellschafts -unternehmungen
145	下	6	したてまた	したがってまた

「貨幣資本と現実資本」(『資本論』第3部第30-32章)の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——(『経済志林』第64巻第4号, 1997年3月)

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
53	上	2	「銀行資本の構成部分	「銀行資本の構成部分」
54	下	8	信用システム	信用制度
62	下	2	Capita	Capital
106	上	12	信用システム	信用制度
109	上	14	信用システム	信用制度
110	上	2	信用システム	信用制度
129	下	14	Credisystem	Creditsystem
133	上	12	信用システム	信用制度
168	下	7	76日	70日
193	下	8	/355上/	/345上/
243	下	1	とすれば,	とすれば3a),

244	上	8		【挿入】 3a) 「同じ貨幣が、もし購買や支払という媒介なしに5人のあいだで貸し付けられたのだとすれば」→「もし購買や支払という媒介がなかったとすれば」
258	上	11	されていない	されている
260	下	13	形態にも	形態にあっても
274	下	3	はいってくる。	はいってくる。」

「『資本論』第2部第8稿の執筆時期について——MEGA第2部第11巻の「付属資料」の作成のために——」（『経済志林』第65巻第4号、1998年3月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
99	上	7-8	再生産過程	再生産
102	下	5	einer	eines
114	下	4	1887年	1879年
〃	下	1	№.19	№ 19
113	下	10	第1に	【先頭を1字空ける】
115	下	5	あった見て	あったと見て

「『信用制度下の流通手段』および『通貨原理と銀行立法』（『資本論』第3部第33章および第34章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』第67巻第2号、1999年11月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
38	上	12	Kreditwesen	Kreditsystem
64	下	1	entrusteing	entrusting
72	下	2	貨幣数量説見解	貨幣数量説的見解
146	上	5	取縮	収縮
〃	上	10	場令	場合
165	下	15	1960年	1860年
180	下	2	[improper]	[improper]」
186	上	3	をれが	それが
202	上	17	[]	〔議長ルイス〕

「『資本論』の著述プランと利子・信用論」（『経済志林』第68巻第1号，2000年7月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
75	上	7	表示に	表示を
78	下	6	1848年	1858年
98	上	12	労働	賃労働
124	上	1	S.435	S.434
147	上	3-4	貸村	貸付

「『貴金属と為替相場』（『資本論』第3部第35章）の草稿について——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』第69巻第3号，2001年12月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
1	上	3	第3部第1稿	第3部第1稿
2	下	4	第29章	第30－32章
"	"	3-2	「通貨原理」と1844年の銀行立法」の草稿について」（第66巻第3号，1999年）	「通貨原理と1844年の銀行立法」（『資本論』第3部第33章および第34章）の草稿について」（第67巻第2号，1999年）
13	上	14	金属柱か	金属鑄貨
38	下	17	第2版でも，	第2版でも，その本文には
63	上	9	Messelden	Misselden
"	"	10	Boisgilbert	Boisguilbert
"	"	"	Potte	Poppe
81	下	2	しまも	しかも
96	上	10	筆者の中途	筆者の注と
"	"	"	おの注番	その注番
102	上	11	①	①
152	下	14	Einfhren	Einfuhren

「『資本主義以前』（『資本論』第3部第36章）の草稿について（上）——『資本論』第3部第1稿の第5章から——」（『経済志林』第69巻第4号，2002年3月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
172	上	10	金貸業者	貨幣の貸し手
174	下	13	この生産様式	「この生産様式

175	上	14	とつて	とつて
177	上	1-2	忘れられる ⁵⁴⁾ 。{	忘れられる。 ⁵⁴⁾ {
"	"	7	没頭しているというのに	没頭しているのはあるが、またしても忘れられるのは
"	"	9	前提だ、ということがまたもや忘れられるのである	前提なのだ、ということである
"	"	11	らは ⁶¹⁾ 排除されている	らは彼の ⁶¹⁾ 地位によって排除されている
"	下	7	挿入 — 「彼の地位によって」	「地位」 — Position → Stellung
180	上	8	剰余生産物	剰余労働 【ここに、「剰余労働」→「剰余生産物」】という筆者注をつける】
187	上	6	によつて	によつて
"	下	1	たとえばローマ	たとえばルーマニア
188	上	1	たとえばローマ	たとえばルーマニア
"	下	15	伴つて	伴つて
193	下	5	1850年の	1550年の
197	下	12	ゲヌア	ジェノヴァ
"	"	5	ゲヌア	ジェノヴァ
198	上	2	習慣	習慣
206	上	14	卸売商業との要求	卸売商業の要求と
212	上	12-13	資本主義的生産様式の、近代的銀行制度の、これらの条件をつくりだす有機的創造物の先駆	資本主義的生産様式のこれらの条件をつくりだす有機的創造物の、〔すなわち〕近代的銀行制度の先駆
215	下	9	「394ページ」	「394ページ」
217	下	11	にとつて	にとつて
224	上	4	一般的な簿記や社会的な規模での生産手段の配分	社会的な規模での生産手段の一般的な簿記や配分
"	上	12	信用・銀行制度	信用・銀行システム
225	上	12	それは	それ〔信用・銀行システム〕は
226	下	14	そして実際にこの生産様式の	そしてそれは実際に
"	"	11	小ブル	小ブル
"	"	10	できたのである。	できたのである。これこそ、すべてのあほうな企画屋やほら吹きたちがのびのびと振る舞う場面なのである。

「『資本主義以前』（『資本論』第3部第36章）の草稿について（下）——『資本論』第3部第1稿の第5章から（完）——」（『経済志林』第70巻第3号，2002年12月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
151	下	5	資本家というは	資本家というのは
153	上	13	蓄藏	蓄蔵
157	下	3	なるとう	なるという
175	上	6	されていという	されているという

「『betrachten すべき』は「再生産過程の攪乱」か「第3部第7章」か——富塚良三氏の拙訳批判に反論する——」（『経済志林』第70巻第3号，2002年12月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
241	下	9	例文をと	例文とを
244	上	9	CD 判	CD 版

「『ではけっしてない (nie)』か『でしかない (nur)』か——マルクスの筆跡の解析と使用例の調査とによって——」（『経済志林』第71巻第4号，2004年3月）

ページ	から	行	訂 正 前	訂 正 後
10	下	13	nur	nie
12	上	9	解説そのもの	解説そのもの
13	下	12	すぐも	すぐにも
17	上	2	えるには	えるには
39	上	12	参入	算入

Theory of Interest-bearing Capital of Karl Marx
—Based on Marx's Manuscript of "Capital"—

Teinosuke OTANI

《Abstract》

Since 1982 I have intermittently published in this Journal a series of articles, a consistent aim of which should be clear and extremely specific: that is to put Marx's manuscript for Ch. 5 of Book III of "Capital" under scrutiny. To start with, I translated the manuscript into Japanese, deciphering its complex structures. In order for my decipherment of it to be scientifically verifiable I added to the translation my own comments and annotations based on my analytical exploration of the manuscript as well as the third Volume of Engels' edition of "Capital". Marx's manuscript was published as vol. II/4.2. of the MEGA in 1993. Since then, I exploited the published version of MEGA-volume as the basis of my translation and also carried the translation of its scientific commentary. This series completed in 2002.

In this article I would recapitulate the main knowledge and observations acquired through my own examinations of the construction of Ch. 5 and the contents of its respective components which nevertheless could hardly be grasped from Engels' edition.

Following point, amongst many, is essential and therefore to be emphasized:

By even now some researchers, almost all of who are relying on Engels' edition, think that the theoretical development in Ch.5 except for the last historical observation consists of the first part which deals with the theory of interest-bearing capital and the second part which inquires into the credit and banking system if not comprehensively provided. But readers, if going through Marx's manuscript, could and

should have become aware that the subject of the whole Ch.5 is entirely tied to the interest-bearing capital.

In the first four sections of this chapter Marx conceptually grasps the interest-bearing capital and then, having based himself on his conceptual examinations established in the previous four sections, he, in the section five, investigates the interest-bearing capital under the credit and banking system, i.e. “monied capital”. Therefore the analysis of the credit and banking system itself should be interpreted as remaining totally outside “Capital”, as Marx himself said at the beginning of the latter section of the manuscript: “An analysis of the credit and banking system ... lies beyond our plan.”